

『ダビデとバテシバ』 一翻訳と注解一

丹羽 佐紀*・山下 孝子**・大和 高行***
 小林 潤司****・杉浦 裕子*****
 (2008年10月30日 受理)

David and Bethsabe: A Japanese Translation and Commentary

NIWA Saki・YAMASHITA Takako・YAMATO Takayuki,
 KOBAYASHI Junji・SUGIURA Yuko

要約

2006年1月から2007年7月にかけて、鹿児島在住の英国近代初期演劇研究者の仲間たちが集まって、月に1回の割合で、エリザベス1世時代の劇作家、ジョージ・ピールの『ダビデとバテシバ』の輪読会を行なった。一連の翻訳は、その輪読会の成果である。

ジョージ・ピールは彼の劇作品に様々な題材を取り入れており、『ダビデとバテシバ』は、聖書のサムエル記下の記事を題材として扱ったものである。劇のあらすじは、基本的には聖書の中に書かれた内容と同じであるが、その描き方にはかなりの相違点が見られ、ピールの独自性が顕著である。

翻訳に際しては、毎回、担当者が準備してきた試訳を全員で細部にいたるまで議論、検討し、その都度必要に応じて修正した。それを、丹羽佐紀が取りまとめて文体の統一を図った。従って、原文の解釈については5名の共訳者が等しく責任を負い、訳文の文体および表現については、主に丹羽に責任がある。解説と訳注の執筆は、丹羽が担当した。

キーワード：聖書、サムエル記下、ダビデ、バテシバ、エリザベス1世

* 鹿児島大学教育学部 准教授
 ** 鹿児島国際大学経済学部 准教授
 *** 鹿児島大学法文学部 准教授
 **** 鹿児島国際大学国際文化学部 教授
 ***** 志学館大学人間関係学部 講師

解説

ジョージ・ピール (George Peele) の劇作品について

ジョージ・ピール (c.1556–1596) は、エリザベス朝時代のいわゆる University Wits と呼ばれるアカデミックな劇作家たちのグループの中でも、多種多様なテーマを劇の題材として扱ったという点において、とりわけ際立った作家であると言える。もともとピールは、教育熱心な父親ジェームズ・ピールのもとで育てられたこともあって、早くからその才能を開花させており、オックスフォード大学在学中には既にかなり多くの詩作品を手がけていた。また、在学中に彼が学問の最高府で身につけた知識や感性は、その後の彼の劇作品に幅を持たせる上で、詩作活動に対すると同様、大いなる影響を与えた。彼が初期に手がけたエウリピデスの *Iphigenia* の英訳版については、その草稿は残っていないが、実際にクライスト・チャーチで 1579 年頃上演されたようである。この作品が観客に対してかなりの好評を博したことは、彼の友人であった William Gager がその出来を称賛していることからわかる。⁽¹⁾ この劇の上演に関して、ピールはカレッジから報酬として 20 ポンド受け取ったとされている。⁽²⁾ ピール自身がこの劇に対してどれほど手応えを感じていたかは定かでないが、少なくともこれをきっかけに、彼はカレッジの催し物のための劇作品をいくつか創作することになり、やがて 1581 年にはロンドンに上京し、舞台をカレッジから宮廷に移して、劇作家としての地位を築き上げていくことになる。

1584 年、エリザベス 1 世の御前で、彼の現存する劇作品としては最初のものとなる *The Arraignment of Paris* が上演された。この作品は、ピールが既にしたためていたトロイ戦争についての詩を、劇作品として創作し直したもので、劇の中では、プライアム王の子孫が建国したと伝えられるイングランドが、「第 2 のトロイ」として表現されている。⁽³⁾ この作品は、同じく 1584 年に *The Araynement of Paris: A Pastorall* として刊行された。1594 年には、四つ折版の形で *The Battell of Alcazar* が刊行される。ピールが実際にこれを書き始めたのは、1588 年にイングランドがスペインの無敵艦隊を破った直後からと推定されており、⁽⁴⁾ 上演記録としては 1590 年頃ロンドンで演じられたという記録が残っている。折りしもイングランドが、無敵艦隊への勝利の後、エリザベス 1 世のもとに對外的に勢力を伸ばそうと海外に目を向けていた時代、この劇を上演することは、当時の観客にとって、とりわけエリザベス 1 世にとって大いに歓迎されるべきことであっただろう。劇の筋は、基本的には歴史的事実に即して展開し、その作風は、同時代の University Wits の仲間である、Christopher Marlowe (1564-93) の *Tamburlaine* (1590) や、Thomas Kyd (1558-94) の *The Spanish Tragedy* (1586) の影響を受け、いわゆるセネカ風の悲劇的要素をふんだんに取り入れている。⁽⁵⁾ それと同時にピールは、S.J.Kozikowski も指摘しているように、この劇のいたるところにパジェントの場面を散りばめることによって、エリザベス朝時代の観客を視覚的に喜ばせることにも成功した。⁽⁶⁾ 1590 年から 1592 年にかけては、*Edward I* (1593 年に、*The Famous Chronicle of King Edward the First* として刊行)、1591 年から 94 年にかけては、*The*

Old Wives Tale（同、1595年刊行）などそれぞれ特色ある作品が次々に上演されることになる。*David and Bethsabe* は、ピール晩年の作品であり、聖書という、それまでのピールの劇作品とは異なる題材をもとに創作されたという点で、注目に値する。上演の具体的記録は残っていないが、おそらくピールの死の2年前（1594年）までには上演されたものと思われる。刊行されたのは死後3年経ってからの1599年、四折り版の形で *The Love of King David and Fair Bethsabe* として刊行された。ただし、この版には、プロットの矛盾が多々見られる。例えば、「コーラス5」は本当は2番目であり、しかもこれが最後である。また、このコーラスで言及されているダビデ王の死の場面は、実際には劇の中で描かれていない。このようなことから、完全にまとまった形としてではなく、幾つかの断片をとりまとめたものとして残っていると考えられる。

以上のように、ピールの手になる劇は、その主題がバラエティに富んでいるのであるが、ピールらしさという点において彼の劇作品全体をとおして共通して言えることがある。それは、ピールはずっと詩を手がけていたということもあって、いずれの劇作品においても彼独自の詩的表現を、効果的に取り入れているということである。*David and Bethsabe* でも、冒頭水浴びの場面でバテシバが太陽や木陰に向かって呼びかける台詞や、彼女の美しさを称えるダビデのブランク・ヴァース、そしてコーラスの場面の荘重な言い回しは、旧約聖書の有名な箇所を、より視覚的・音楽的に観る者に描き出してくれる。この傾向は「キッド、そしてグリーンにおいてはもっと、ピールにおいてはさらにもっと、そしてとりわけマーロウにおいて」見られ、⁽⁷⁾ その詩的表現の豊かさが劇全体にこの上ない奥行きや深さや彩りを添えているのである。ただし、その詩的表現ゆえに、劇的場面に必要な力強さを出しきれていないことがあると述べる批評家もいる。⁽⁸⁾ また、主題がバラエティに富むということは、別の見方をすれば統一性、一貫性に欠けるともとれ、彼に対する評価は、全体的に両極に二分されていると言えよう。

A.R.Braunmuller は、ピールの生活は実際のところ決して楽ではなく、彼が次々に「作品を書いたのは金を稼ぐため」(“Peele wrote to earn money”) という現実的な側面もあったと述べている。当時、庇護者の支えだけでは劇作家としての地位と生活水準を維持していくのもかなり大変なことで、Braunmuller は、「ピールがなんとか経済的にやりくりしていくことができたのは、最初の妻が受け継いだ遺産のおかげ」ではないかとも述べている。⁽⁹⁾ その真相はともかく、第一の庇護者たる観客、エリザベス1世を喜ばすべく、ピールは、彼の詩的才能と知識を駆使して、華やかな見世物の場面をつくることで、コンスタントな人気を得たのである。

聖書を題材とした背景

ピールが、彼の劇の題材として、特に旧約聖書のダビデ王にまつわる物語を選んだ背景については、いくつかの観点から推察することができる。そのためにはまず、当時のイングランドにおける宗教的背景という事情を考えてみる必要がある。ヘンリー8世の離婚問題に端を発したイングランドの宗教改革は、ローマ・カトリックからの分離によって、自国における独自の宗教体制

を整えることを必然的に余儀なくされた。その具体的な事象としては、礼拝のあり方、聖餐式のあり方、祈祷書の作成など幾つか挙げられるが、とりわけ、聖書の英訳という大きな出来事との関連性を考察してみないわけにはいかない。

1520年代、未だ聖書の英訳が厳しく禁じられていた時代に、自国語による聖書の刊行の必要性を強く感じたティンダルは、命の危険を冒してまでもそれを実行することを決意し、ハンブルグに逃れる。やがてドイツでルターの影響を受けた彼は、自ら新約聖書を英訳し、ケルンで印刷する。この聖書は、まもなくイギリス本国に流出するようになり、危険性を察したイングランドの教会当局が、1530年には彼の聖書を燃やすというような阻止行動をとったにもかかわらず、その後も本国に流れ続けた。ティンダルがさらに改訂版を出した1534年、奇しくもイングランドの教会は、教皇首長権を否認し、国王至上令を出して、事実上ローマから独立したのである。時のカンタベリー大主教であり、かつ改革派のクランマーらは、公認の英訳聖書を作ることを王ヘンリーに強く要望する。これが認められ、1538年には、カヴァデルの手になる『グレート・バイブル』(The Great Bible)が全ての教会に設置された。この聖書は、実はかなりの部分をティンダル訳に負っており、信仰の基盤を教会ではなく聖書における神の御言葉に置くという、プロテスタント的色彩の濃いものであった。

1553年、幼少のエドワード6世が15歳で他界すると、メアリの王位継承によって、イングランドは再びカトリックの時代に逆戻りする。迫害を恐れて大陸ジュネーヴに渡った新教徒たち、特にカルヴァンの教説を信奉する人々は、そこで、より正確に神の言葉を伝えることを目的として、聖書の改訂に乗り出す。こうして1560年、いわゆる『ジュネーヴ聖書』(The Geneva Bible)が出版された。この聖書は、旧約の部分は英訳聖書としては初めてヘブライ語から訳され、また翻訳全体を通してても正確であった。さらに、従来のブラック活字ではなく、ローマン活字という読みやすい字体であったので、多くの人々に歓迎された。欄外の注には、特にカルヴァン主義的な意図が読み取れるところに特徴がある。⁽¹⁰⁾ エリザベス1世は、キリストの教会を信仰の中心におくノックス派を敬遠したので、1559年カンタベリー大主教となったパーカーは、カルヴァン派的な辛らつさを避けた形での聖書の改訳を提案し、これが1568年、『主教たちの聖書』(The Bishops' Bible)として発行された。

ピールは、少なくとも『グレート・バイブル』には目を通していただであろう。『ジュネーヴ聖書』および『主教たちの聖書』についても、見ていた可能性が高いが、確かなところは現在のところわかっていない。いずれにせよ、聖書の英訳が公認されてから数十年、紆余曲折を経ながらも広く一般的に聖書が読まれるようになっていく中で、ピールの描くダビデ王の物語が一般の観客にもじかに理解できる内容として鑑賞されたことは、想像に難くない。

次に、イングランドの国教会において、現代に至るまで礼拝の中で主要な役割を果たしている祈祷書(The Book of Common Prayer)の作成がこの時期に行なわれたことも、心に留めておく必要がある。クランマーは、それまでカトリック的な性質が強かった礼拝様式を改革するために、

手始めに英語による礼拝の徹底を推し進めた。彼が作成した、聖餐式をはじめとする様々な式文の英語の原案は、1549年、その使用が義務づけられる。第一祈祷書と呼ばれているものである。この祈祷書は、多少なりともまだカトリック的要素が残っていたため、急進的な改革派の反発を招き、1552年には、よりプロテスタントとしての方向性を明確にした形で新たな祈祷書が作成された。第二祈祷書と呼ばれるこの祈祷書は、その後広く英国国教会で礼拝に使用されることになる。ピールが使用していたのもこの祈祷書であろう。この中には、ダビデ詩篇が多く含まれている。

さらに、詩篇の讚美歌集の存在も忘れてはならない。D. MacCulloch は、プロテスタントたちが、階層や世代の壁を乗り越えて最も効果的に彼らの教えを伝道するための手段として、詩篇の讚美歌を利用したことを、次のように説明している。「それ（詩篇）は、フランスだけでなく、改革派がプロテスタントの大儀に新たな活力をもたらそうとした所ではいかなる地であっても、改革のための密かな武器となった。・・・韻文で書かれた詩篇は、プロテスタントの伝道を、文字が読める者同様文字が読めない者をも等しく巻き込む巨大な運動とするのには完璧な手段であった。英雄ダビデによって歌われる正真正銘の聖書の言葉、これより優れたものがあろうか？詩篇は容易に暗誦することができたし、・・・礼拝の時だけでなくマーケット・プレイスで口ずさむこともできた。歌えば即座にその人がプロテスタントだと認識できたし、また即座にプロテスタントどうしを・・・恍惚状態の仲間意識のうちに結びつけることもできた。・・・女性は、当時説教はおろか祈ることもできなかったが、讚美歌なら男性と共に歌うことが可能であった。詩篇を歌うということはすなわち、解放一司教や聖職者の介入を離れ、ダビデ王とともにひとりの王となって、直接彼の神と対話をするということの意味した。」⁽¹¹⁾

このような状況であってみれば、聖書が広く一般に読まれるより以前から、ダビデ王は人々にとって身近な存在であったに違いない。詩篇第51篇「ミゼレーレ・メイ・デウス」には、「聖歌隊の指揮者によって歌わせたダビデの歌。これはダビデがバテセバに通った後預言者ナタンがきたときによんだもの」(“To the chaunter, a Psalme of David, / when the prophet Nathan came unto / hi, after he was gone ī to Bethsabe” (The Great Bible)) として、「自分のとがを知っている」(詩篇第51篇3節)ダビデが自らの罪を告白し、神への確かな信仰により神の「豊かなあわれみ」(詩篇第51篇1節)と救いを求める歌が載せられている。人々は、高らかにこの歌を歌ったことであろう。

聖書に登場する人物たちとエリザベス1世

エリザベス1世時代には、劇や見世物の多くは、現代のように純粹にエンターテインメントとして興じられるものではなく、何らかの政治的プロパガンダを含んでいた。そして、聖書に登場する人物も、中世の聖史劇において示されるような道徳的、抽象的人物としてではなく、現実の社会で人々に影響力を持つ人物との関連性において劇に取り入れられた。したがって、多くの批

評家が指摘しているように、*David and Bethsabe* もまた、政治的アレゴリーという観点にたつて見ることができよう。すなわち、ダビデ王のイスラエルがその子ソロモンによって受け継がれていく一国の継続性は、エリザベス1世が統治するイングランドが永遠に繁栄し続けていくことへの期待ならびに女王への賛辞と結びつけられているのである。Michelle Ephraim は、特に当時の劇に登場する聖書の中の女性とエリザベス1世の関連性に注目した興味深い説を展開しており、ピールの描くバテシバを、キリスト教徒の観客を聖書に約束された贖いへと期待どおりに導いていく役割を果たす人物として捉え、やはりエリザベス1世と重ね合わせている。⁽¹²⁾ だからこそ、ダビデだけでなく観客もまた、バテシバの体の美しさが意味するところを「正しく」読み取る必要があるとする。また Ephraim は、アブサロムの父親に対する裏切りを、カトリック教徒であったメアリの、異母姉妹エリザベス1世に対する反逆と捉える見方も紹介している。Ephraim はこの他にも、例えば作者不詳の *The Historie of Jacob and Esau* (1568) の中の女預言者デボラが持つ統治力と、ヤコブ・エサウ兄弟の母リベカが持つ母性の結合に、エリザベス1世の象徴を読み取ろうとする。また、1525-9年頃に書かれ、1561年に刊行された作者不詳のインタールード、*The Godly Queene Hester* の中で描かれているエステルを、キャサリン・オブ・アラゴンもしくはエリザベス1世と同一視している。すなわち、エステルによるユダヤ人の救いという聖書の物語を、エリザベス1世が、彼女の臣民であるプロテスタントを保護することと捉え、邪悪なハマンを打ち破るエステルをカトリックを打ち破る女王という状況にあてはめて解釈しているのである。⁽¹³⁾

サムエル記下のあらすじとピールの *David and Bethsabe*

旧約聖書のサムエル記下に記されているダビデとバテシバの物語は、ダビデの過ちと神の怒りの業、ダビデの改悛、そして神による贖いというプロセスで構成されている。イスラエルの王ダビデは、忠実な部下であるヘテ人ウリヤの妻バテシバに対して欲情をもち、その欲情を強引に満たす。ダビデの行為は神の怒りにふれ、彼は次々に不幸な目に遭う。まず、不義によってバテシバに生まれた子供は病にかかってまもなく死ぬ。息子アムノンは異母妹のタマルに欲情を抱いて陵辱し、陵辱したあと彼女を捨てて精神的にも辱める。タマルの兄であるダビデの息子アブサロムは、妹に代わってアムノンに復讐を果たし、これを殺す。このことが、兄弟殺しの罪として父親ダビデを苦しめる。さらにアブサロムは、王位への野心を抱いて父親ダビデへの反逆を企てる。結果的には無念の死を遂げるのであるが、ダビデは愛する息子を失う悲しみを味わうことになる。このように耐え難いほどの運命に見舞われながらも、聖書では、ダビデは悔い改めと神への絶対的信頼のうちに、イスラエルの約束された王として君臨し続け、バテシバとのあいだに後継者ソロモンをもうける。聖書が強調するのは、あくまでダビデの罪、改悛、贖いというテーマである。

ピールの *David and Bethsabe* も、基本的には聖書の物語に忠実に従っている。すなわちその主たるテーマは、ダビデの犯した過ちと災難、息子アブサロムの不幸、そして神による最終的な贖

いである。しかしこの作品には、多くの批評家たちが指摘するように、聖書の領域にとどまらないピール独自の劇的趣向を見ることができる。

では、具体的にピールのダビデとバテシバは、聖書に描かれている2人とどう違うのか。印象深いのは、劇の冒頭で描かれるバテシバの肉体的な美しさである。聖書のサムエル記下では、バテシバの美しさについては「その女は非常に美しかった」（サムエル記下 11:2）との表記があるだけである。しかし、ピールの劇では、彼女の美しさが、彼女自身の台詞と、それに続くダビデの台詞とによって、あたかも二重唱のように観客に強調される。「さあ、むかしエデンの園でアダムの愛する妻を魅惑的なものにした / あの香りを帯びたやさしい西風よ、吹いておくれ。 / そしてお前の絹の扇で、私の胸元を煽いでおくれ」（〔第1場〕11-3行）というバテシバの台詞と「どんな樹木、どんな木陰、どんな泉、どんな楽園が / あのように美しい女性の美を楽しんでいることだろう」（〔第1場〕28-9行）というダビデの台詞は、「樹木」「楽園」という言葉に示されるように、一方で当然ながらアダムとイブが罪を犯して楽園を追放される場面を観客に想起させるのではあるが、他方で女性の肉体が持つ美しさ、抗うことのできないほどの創造された美の魅力をもあますところなく表している。そこには、例えばヴィーナスとアドニスのような神話的世界の雰囲気さえ漂っている。バテシバのエロスの美は、禁欲の戒めを伝える媒体であると同時に、人間賛歌の具体的表象でもあるのだ。ピールは、彼の得意とする詩的表現をふんだんに取り入れることによって、ルネサンス的な風潮をここに描いてみせたのではないか。

また、ダビデの息子アブサロムが、ヨアブに殺される場面にも注目したい。聖書では、アブサロムがヨアブに殺される場面は、その事実が記載されているのみである。しかし、ピールの劇では、父親に反旗を翻した自らの愚かな行為を今わの際に悟り、慌て、許しを請うアブサロムの弱さが彼の言葉で切々と語られている。「助けてくれ、ヨアブ、このアブサロムを助けてくれ。 / ……頼む。もう一度、父に会わせてくれ。わが最愛の父にしてそなたの主君に。 / 父の目の前で血の涙を流すことで、 / 私の最後の服従が真っ当で後悔の念に満ちたものであることを / 大地が証言し、天が記録できるように。」（〔第12場〕33-41行）アブサロムのこの訴えは、死に直面して初めて知らされる己の弱さ、後悔の吐露なのである。『ジュネーヴ聖書』では、アブサロムの親不孝について“Whose heart he sawe that Satan had so possessed that he wolde leave no mischief un attempted”と厳しく弾劾する欄外注がついているが、ピールのアブサロムに観客が見るのは、人間の弱さと脆さ、そしてそれ故の劇的場面の美しさである。⁽¹⁴⁾ それに対し、裏切りの徒に対してその報いを与えること、それこそが正当な道であり、アブサロムを殺すことは「ヨアブの哀れみ」、「愛なのだ」（〔第12場〕74-5行）と宣言してアブサロムにとどめを刺すヨアブの台詞も聖書にはなく、ピールの劇でのみ語られているものである。

さらに、愛する息子アブサロムが死んだことを聞かされた時、ダビデ王自身の弱さも、その台詞からあらわにされる。聖書では、「わが子アブサロムよ。わが子、わが子アブサロムよ。ああ、私が代って死ねばよかったのに。アブサロム、わが子よ、わが子よ。」（サムエル記下 18 :

33)と嘆くダビデに対し、すぐにヨアブがその行為を非難し、民よりも裏切りの徒を上に乗くのかと責める。ピールの劇では、ダビデ王の嘆きにはまずバテシバが二重唱のごとく同調し、その悲しみに色を添える。「死ぬがいい、バテシバ。お前のダビデ王が嘆いているのを目にして。」(〔第14場〕187行)「ああ、その悲しみにとってわが血が毒となり、/ 悲しみの唇がわが胸を空っぽになるまですすってくればいいのに！ / そうすればダビデへの愛が彼を癒してくれるかもしれない、たとえバテシバが死んでも！」(〔第14場〕193-5行)「血」「唇」「胸」という言葉は、第1場で示されるバテシバの体の美しさを、当然観客に思い起こさせるし、その美しさゆえに今の嘆きもたらされたのだということもまた、同様に観客は気づかされる。だがダビデは、アブサロムの死が報じられる前に、バテシバとの会話の中で、アブサロムもまた自分の息子として、父親の愛情を受けるにふさわしくなかったかと問う。そこには、王である前にひとりの父親として息子の反逆と不幸を嘆かずにいられない、人間の自然な情—あるいは、一国の王としてはその弱さ—が描かれている。もとはといえば、ダビデ自身が犯した罪ゆえに招かれた不幸である。だからこそ、この嘆きの中に観客は人間の普遍的な弱さを見るのである。

しかし、最終的にはダビデはイスラエルの王として神に導かれていく。そのことは、ダビデ王と息子ソロモンとの会話の中で既に明確にされている。この場面でもまた、ソロモンの若者らしい未来への夢と、野望が傲慢にならないよう諭すダビデの態度に、観客はやはり人間らしさを見ることができるのである。それは、旧約聖書において語られている物語を劇でなぞっていくというだけではなく、人間の弱さに具体的な形で共感しつつ、ともに嘆き、それでいてやがて来るべき神の王国を聖書の人物と同時に待ち望むという二つのことを、観客に対して可能にする技なのである。ここに、ダビデ王と同じように詩人であったピールの力量を見ることができる。

刊本と聖書、ならびに翻訳について

翻訳にあたって私たちが参照したのは、以下の刊行本である。

- (1) Bullen, A.H. ed. *The Works of George Peele*. 2 vols. London: John C. NIMMO, 1888.
- (2) Fraser, Russell A., and Norman Rabkin, eds. *Drama of the English Renaissance: I. The Tudor Period*. Upper Saddle River, NJ: Prentice Hall, 1976.
- (3) Thorndyke, Ashley. *The Minor Elizabethan Drama*. Vol.1. London: J.M. Dent&Sons LTD. New York: E.P. Dutton & Co.Inc., 1949.

上記のうち、(2)を底本とし、他の刊本については必要に応じて随時参照した。

また、参考にした聖書は、以下のとおりである。

- (1) The Great Bible — A facsimile of the 1539 edition. With an Introduction by Yoshio

- Terahara. Elpis, Tokyo, 1991.
- (2) The Geneva Bible — A facsimile of the 1560 edition. With an Introduction by Lloyd E. Berry. The University of Wisconsin Press, 1969.
- (3) Martin Luther, Biblia / das ist / die gantze Heilige Schrifft Deudsh, Band 1. Roderberg - Verlag G.m.b.H. Frankfurt am Main, 1983.
- (4) The Holy Bible. 1611 Edition(King James Version). Thomas Nelson Publishers, 1990.
- (5) 日本聖書協会編 『口語訳聖書』 日本聖書協会、1955年
- (6) 日本聖書協会編 『聖書 新共同訳』 日本聖書協会 1991年

私たちは、2006年1月から2007年7月にかけて、月に1度、鹿児島大学の大和高行研究室に集まって輪読会を行なった。一連の翻訳はその成果である。毎回、担当者が準備してきた試訳を全員で細部にいたるまで議論、検討し、その都度必要に応じて修正した原稿を、丹羽佐紀が取りまとめて文体の統一を図った。従って、原文の解釈については5名の共訳者が等しく責任を負い、訳文の文体および表現については、主に丹羽に責任がある。解説と訳注の執筆は、丹羽が担当した。なお、試訳作成の段階で、筑波大学准教授の佐野隆弥氏に丁寧かつ鋭い助言を賜った。心から感謝申し上げる。

注)

- (1) Fredson Bowers ed., *Elizabethan Dramatists: Dictionary of Literary Biography*, vol.62. (Detroit. Michigan:Gale Research Company. Book Tower, 1987) 243.
- (2) A. R. Braunmuller, *George Peele* (Boston: Twayne Publishers, 1983) 7.
- (3) Braunmuller, 30-45.
- (4) *DLB*, 247.
- (5) *DLB*, 249.
- (6) *DLB*, 246.
- (7) George Saintsbury, *Elizabethan Literature* (London: Macmillan and Co., Limited, 1918) 69.
- (8) Allardyce Nicoll, *British Drama: An Historical Survey from the Beginnings to the Present Time*, 3rd ed (London:George G. Harrap & Company LTD., 1927) 76-7. Nicoll は、基本的にはピールの詩的才能については評価している。
- (9) Braunmuller, 10.
- (10) 聖書の英訳に至る歴史的経緯については、八代崇著『イギリス宗教改革史研究』（創文社、1991年）143-54に詳しい。
- (11) Diarmaid MacCulloch, *Reformation: Europe's House Divided 1490-1700* (Penguin Books, 2003) 307-8.
- (12) Michelle Ephraim, *Reading the Jewish Woman on the Elizabethan Stage* (Ashgate, 2008) 69-88.
- (13) Ephraim, 27-68.
- (14) The Geneva Bible, Samuel II:Chap.XVIII, 142.『ジュネーヴ聖書』では、アブサロムの美しい髪の毛が木の枝にひっかかる場面でも、“This is a terrible example of Gods vengeance against them that are rebels or disobedient to their parents.” (104) という注をつけている。

『ダビデとバテシバ』

登場人物⁽¹⁾

ダビデ

アムノン アヒノアムが生んだダビデの息子

キレアブ アビガイルが生んだダビデの息子

アブサロム マアカが生んだダビデの息子

アドニヤ ハギテが生んだダビデの息子

ソロモン バテシバが生んだダビデの息子

ヨアブ ダビデの軍隊の隊長 (ダビデの甥すなわち彼の姉妹ツェルヤの息子たち)

アビシャイ

アマサ ダビデの甥すなわち彼の姉妹アビガイルの息子。アブサロムの軍隊の隊長

ヨナダブ ダビデの甥すなわち彼の弟シメアの息子。アムノンの友人

ウリヤ バテシバの夫。ダビデの軍隊の軍人

ナタン 預言者

ザドク 大祭司

アヒマアズ 彼の息子

アビヤタル 祭司

ヨナタン 彼の息子

アピトヘル アブサロムの顧問の長

ホシャイ ダビデの家来

イッタイ ダビデの家来

シメイ ダビデの譴責者

エトレイ

ハヌン アンモン人の王

マカアス ガテの王

使者たち、兵士たち、羊飼いたち、および従者たち

タマル マアカが生んだダビデの娘

バテシバ ウリヤの妻

テコアのやもめ

ダビデの側妻たち

バテシバの侍女

合唱隊

序詞⁽²⁾

イスラエルの類まれな歌びとについて、⁽³⁾
 その聖なる書きものためてたい勝利とについて、私は歌う。
 歌びとの詩神は、大天使らがエホバ⁽⁴⁾の息から抽出した
 靈感を与える露に濡れ、
 詩神の額は、天がシオンの頂きとシナイ山⁽⁵⁾に降り注いだ
 栄光の花々で飾られた。
 歌びとの象牙のリュートの胴には⁽⁶⁾
 ケルビムと大天使たち⁽⁷⁾がともに胸を寄せたものだ。
 彼の聖別された指が、人の心を奪う堅琴の
 黄金の弦を弾くと、
 それは天の軍勢に向けての合図となって
 天使らは稲妻の翼に乗って雲を分け
 征服者たる彼の足元に彼らの水晶の武具を脱ぎ捨てたのだ。
 このエホバの歌びとたる甘美な詩人について、
 また彼の美しい息子⁽⁸⁾について私は歌わんとする。
 されば助けたまえ、神聖なるアドナイよ、⁽⁹⁾
 私のよく調律された歌の翼に乗せて
 聞く者たちの心を天の塔の上にまで導き、
 このいとも高き飛翔において、彼らの上り行く翼が
 あなたの聖なる御手のほか、何ものも鎮め得ない火によって
 焼かれることのないように導きたまえ。
 私の力弱き詩神は、あなたの助けを求めて翔び行き、
 あなたの足元で、その鉄のペンを用いんとする。

[10]

[20]

序詞役はカーテンを引く。すると侍女を伴って泉で水浴びをしているバテシバの

姿が現れる。彼女は歌を歌っている。ダビデは上方に座してそれを眺めている。

[第1場]

歌

灼熱の太陽よ、涼しげに燃え盛れ、心地好い風に吹き冷まされて。
 美しい乳母である暗い陰よ、私の白い髪を陰で覆っておくれ。
 輝け、太陽よ、燃えよ、火よ。吹け、風よ、そして私を安らかにしておくれ。
 美しい乳母である暗い陰よ、私を包んで私を喜ばせておくれ。
 私のやさしい乳母である陰よ、私が燃えないよう守っておくれ、
 私が嘆きを招く楽しい原因を作らないでおくれ。
 私の美しさの火が、
 放逸な欲望を燃え上がらせることも、
 浮薄にさまようギラつく目を
 射ることも、させないでおくれ。

[10]

バテシバ さあ、むかしエデンの園でアダムの愛する妻を魅惑的なものにした
 あの香りを帯びたやさしい西風よ、吹いておくれ。
 そしてお前の絹の扇で、私の胸元を煽いでおくれ。
 陽の射し込まぬこの木陰も、お前は自由に吹くことができる。
 この波立たぬ泉よりも滑らかで、
 その水よりも清らかなお前のからだは
 陽光の槍が突き通せぬところにも、入り込むことができる。
 お前と、お前の妹である柔らかく神聖な空気、
 いのちの女神、健やかさの守り女(びと)よ、
 すべての泉をさわやかに、あずまやを快適にしておくれ。
 真鍮の門も、彼女が入るのを拒むことはできず、
 茂った藪も、お前の繊細な息を妨げることはできない。
 だから、お前の緩やかな喜ばしい衣装でからだを飾り、
 お前の翼に乗せて、繊細な香りを運んできて、
 木の葉の間を歩いて私たちと戯れておくれ。

[20]

ダビデ 何という旋律、何という言葉、何という容姿、何という驚きが
 私の心を貫いて、それを急激な火で燃え上がらせることだろう。
 どんな樹木、どんな木陰、どんな泉、どんな樂園が

あのように美しい女性の美を楽しんでいることだろう。

かつて、完全な幸せのうちに置かれて、大天使たちの旋律の [30]

抑揚をもって奏でられる誉め歌を、

あのおおらかな天に聞かされた美しいイーブも、

この美しい女性の言葉や歌声が私の心に与えてくれるより

もっと大きな喜びを、彼女の夫に与えることはなかった。

彼女の心地よい重さを支えるあの美しい草原が、

いつも、さまざまな色の花で輝いていればよい。

あの貴重な泉が、純金の砂を湧き上がらせればよい。

大地の奥深くから刺すようにしみ出て

泉を涸らすことがない銀色の流れが、丸石の代わりにルビーやサファイアや
緑石と戯れ合ってくればよい。 [40]

岸辺は、泉から涸れることなく水が湧き出すその喜び故に、

水が立てる音を聞きながら眠る黄金の

巻毛のような苔に覆われるがよい。

彼女の東屋（あずまや）を美しく飾る全ての草は、

朝ごとに露ではなくて、マナを生じさせよ。

さもないればその露は、真珠の連りのように、ヘルモンの山に降りる露よりも、⁽¹⁰⁾

あるいは老アロンの鬘⁽¹¹⁾から滴る香油よりも

もっと甘美なものであればよい。——

ホシャイよ、ここに来て、お前の主人たる王の用にあたれ。

(ホシャイ登場)⁽¹²⁾

ホシャイ 王にはいかなる用を仰せでございましょうか。 [50]

ダビデ 見よ、ホシャイ、あのイスラエルの花を。

主が私に賜った全土で、

王に従う最も美しい娘だ。

泉のそばのイサクの愛する人よりも美しく、

新しく切り倒されたばかりのシーダーの樹皮の内側よりも輝かしく

香りのよい没薬の焔よりも甘美で、

天の王の前で、西風の翼に乗って踊る

銀色に輝く雲よりもっと魅力的だ。

ホシャイ 彼女は、いまヨアブとともにラバの町を包囲している

ヘテ人⁽¹³⁾ ウリヤの妻、バテシバではありませぬか。 [60]
 ダビデ 行って、あの女をすぐに、王のもとに連れてまいれ。
 彼女に告げよ、あの気品ある美しさが、王のお気に召したとな。
 ホシャイ かしこまりました。

(ホシャイ退場してバテシバのところへ行く)

ダビデ 輝くばかりのバテシバには、ダビデの住まいで
 清浄この上もない扁桃の花⁽¹⁴⁾を浸した水で、からだを洗わせ、
 山羊の乳の湯浴みで、その美しさを磨かせよう。
 輝くバテシバは、私の欲望に土壌を与え、
 土壌に緑草を、そして緑草に花を与え、
 花に甘い香りを、そして香りに翼を与え、
 その翼に乗せて王たちの心に喜びを運んで行く。 [70]

(ホシャイ、バテシバのところに現れる。彼女はひどく驚く。)

ホシャイ 美しいバテシバ、イスラエルの王が
 王宮の塔からあなたの水浴びをご覧になり、
 あなたの優美な姿が、そのお心になつた。
 だから、来て、王の前にひざまずいてご挨拶をなささい。
 王は慈愛に富む方で、賜り物も多いであろう。
 バテシバ このバテシバが王の御意に適ったとは、私は何者なのでしょう。
 また、移ろいやすい美しさのために、王がその家来の妻を
 お望みになるとは、ダビデ王はなんとのお方でしょう。
 ホシャイ 美しい人よ、知ってのとおり、ダビデ王は、イスラエルの
 神の御旨に適って選ばれた、賢明で正しいお方です。 [80]
 だから王のお心を満足させる行為であれば、
 どんなことにも、王に向かって批判がましいことを言わないことです。
 バテシバ 神ご自身によって選ばれた私の主である王は
 節操のある方ですから、その情慾を燃え上がらせることが
 あってはなりません。私は無節操を憎みます。
 ホシャイ バテシバ、あなたは王のことを誤解し、王の名誉を疑っています。
 王の誠実さがイスラエルの王冠を持続させ、

その座にとどまらせていればこそ、すぐにあなたを連れてくるよう
私に命じられたのです。

バテシバ 王の貧しいはしためは、ご主人さまの仰せに従います。

ホシャイ では、おいでなさい。王への務めを果たし、
その御意に合うよう振る舞うのですよ。 [90]

(退場)

ダビデ さあ、愛しい女がやってくる、小鹿のように足取り軽やかに。

わが熱き想いをその髪に絡ませて運んでくる。

あの女との愛を楽しむために堂々たる家を建てよう。

百の小川のせせらぎが聞こえる場所がいい、

その流れが彼女のこの上ない悦びに敬意を表し、

とぐろを巻いて巣籠もりする蛇の如く、

さざなみとなってすばやく渦巻き、

散策する彼女の美しい足取りにまどわりつくように。

そしてそのさざめきが呼び起こした安らかな眠りが、 [100]

黄金の笏を彼女の両眉に当て、寝つかせてくれるように――

扉を開けなさい。私の愛する人を迎え入れるのだ。

さあ、開けよ、開けつつ歌え、

「ようこそ、麗しのバテシバ、ダビデ王の愛する人よ」と。

(ホシャイ、バテシバを伴って登場)

ようこそ、麗しのバテシバ、ダビデ王の愛する人よ。

そなたの骨格を包む美しい肉体の美しさがさきほど露わになったとき、
わが両眼はその一切の美しさで射抜かれた。

天のまばゆい目である太陽が最も燃え盛るのは、

火のように熱い天球に張り付いて湾曲した黄道帯を最も高く昇り、

この地球から最も離れたところで輝く時であるように、 [110]

そなたの美しさが私の魂を征服して焼き焦がしたのだから、

より近しく魂を癒してもらうため、そなたをそばへ呼び寄せたのだ。

バテシバ 王様、あまりに近く命中したのですね、あなたの無防備な心臓に。

私の不運な美しさが射抜きましたのは遥か彼方からでしたのに。

この惨めな昼が夜に変わってくれていたらよかった！

あるいは、黒い雲かなにかが太陽を覆い隠してくれていたなら！

その明るさのせいで王様がお自分の名と私の操が汚されるのをご覧になる前に！

ダビデ　いとしい人よ、もしも愛がないためにそなたの魂が

王よりも過敏に名誉の穢れと感じたのだとしても

[120]

(それというのも、愛はときとして王たちを玉座から引きずりおろすものだから)、

かつて我が心臓が射抜かれて傷つき、そなたを傷つけたように、

ここへ来て私を慰めることでそなたの慰めを味わうがよい。

バテシバ　1つの薬でわたくしたちの別々の傷を癒すことはできません。

むしろどちらとも骨まで膿みただれないともかぎりません。

ですから、王様にあらせられましてはご自分のご回復にお努めくださいませ。

両方慰めようとして、双方とも手の中で朽ち果てることになってはいけませんから。

ダビデ　私にまかせるがよい、いとしいバテシバ。

もっと深い傷でも治す技に通じておるゆえ――

では、ホシャイよ、わが家臣のヨアブの元へ急ぎ、

[130]

ウリヤを帰還させるよう命じるのだ。

できる限り急ぐのだぞ。

ホシャイ　王様のお望みにかないますよう馳せ参じます。

(退場)

[第2場]

(ヨアブ、アビシャイ、ウリヤ、その他数名、陣太鼓を鳴らし、旗をなびかせて登場)

ヨアブ　勇敢たれ、イスラエルの猛者たちよ、

必殺の武器を構えよ、

傲慢なアンモンの子孫たち⁽¹⁵⁾の胸めがけるのだ。

奴らはお前たちの王が遣わした特使たちを醜く損なった。⁽¹⁶⁾

鬚を半分切り落とし、服を半分切り取った。

イスラエルを侮辱し、イスラエルの婦女が生んだ子孫を侮辱したのだ。

お前たちが戦っているのはエホバのための聖戦、

ダビデ王の神であり、われらの神であり、ヤコブの神であるエホバは

お前たちの武器を勝利の一撃へ導き、

足並みをそろえさせ、お前たちの思いを指揮して [10]

勝利の宿る戦略へいたらしめる。

エホバは高みよりその神聖なる視線を投げかけ、
お前たちの敵どもが死を求めて駆け回るのを目にし、
その労苦と希望をあざ笑う。

その一方、お前たちの身体と敵どもの鈍ら刀の間で
エホバはエホバの誉れという堅牢な鎧を身につけ
敵の振るう剣に虚しく空を切らせるのだ。

アビシヤイ このラバの町を眼前にしてわれらが陣を張り、
激しく密に降り注ぐ危険な矢を放とう。

かつてモーセが稲妻まじりの雹を [20]
野のいたるところに猛烈に降り注ぎ、⁽¹⁷⁾

ファラオの同胞もエジプトの実りも破壊したときのように。

ウリヤ 力強き隊長であるヨアブ様ならびにアビシヤイ様、まずは
この堂々たる要塞を急襲して攻め登らせてください。
敵の用水と泉もすべてここに 있습니다。⁽¹⁸⁾

それによって、町も簡単に落とすことができますよう。

ヨアブ ウリヤはわれらの攻撃にあっぴな助言をくれた。

彼が言ったとおり、要塞を襲撃しよう。

今こそアンモン人たちの王であるハヌンに [30]
われらが勝利の斬り合いを撃退できるものなら撃退させてみようではないか。

(ハヌンがマカアス王、その他の者たちとともに城壁の上に現われる)

ハヌン イスラエルの牧羊犬どもがアンモン王の強大なる子孫から
何を掠め取ろうというのか？

われら勇敢なるアンモン人と堂々たるシリア人たちから？

お前たちの近頃の度重なる勝利をもってしても

われらを降伏させることもできなければ、われらの勇気を挫くこともできはしない。

この要塞によじ登れるものならよじ登ってみるがよい。

われらの怒りの剣の一撃でお前たちを地面に叩き落とし、

憎むべきお前たちにわれらの敗戦の恨みを晴らしてくれようぞ。

ヨアブ ハヌンよ、そなたの父のナハシュは

神聖なるダビデが不運にも流浪の身であったとき、⁽¹⁹⁾ 救いの手を差し伸べ、 [40]

天寿を全うし、安らかに息を引き取った。
 だがお前はその報いを刈り取るかわりに
 それを足で踏みにじり、われらの王をあざ笑った。
 それゆえ、そなたの人生に壮絶な最期をもたらし、
 そなたの鮮血をわれらの剣に染み付かせてやる。

マカアス 失せろ、貧しいイスラエルの羊飼いの杖を携えたお前、⁽²⁰⁾

生まれ卑しき王に仕える傲慢な指揮官よ、
 ここから立ち去り、王の羊たちの囲いの内にとどまるがよい。
 それというのも、もしもお前たちがアンモンの実りを食い物にし、
 シリア人たちの実り豊かな草地に彷徨い出ることがあれば、
 われらの国土の番をするマステフ犬たちにお前たちの首を噛ませ、
 お前たちの強欲な喉から喉笛を引きちぎってやるのだから。

[50]

アビシャイ この異教徒どもの不敬の数々、だれが黙って耐えられようか？

ウリヤ このようにけなされてわが魂は苛立つばかりです。

ヨアブ 突撃せよ、ダビデ軍の勇敢な男たち、
 そしてこの毒づく卑劣漢どもを叩き出すのだ。

(突撃し、ダビデ軍が要塞を勝ち取ると、ヨアブが上方で語る)

かくてわれらは要塞を勝ち取った。今からこのとりでを守るのはわれらだ。
 アンモンの子孫でもシリアの子孫でもない。

(ホシャイが下方に登場)

ホシャイ 軍を率いるヨアブ様はどちらにおいでですか。

ヨアブ 軍を率いるヨアブはここだ。

[60]

ホシャイよ、上がって来い。われらはとりでを勝ち取ったのだ。

ホシャイ ホシャイはよいときに参りましたのですね。

(ホシャイがヨアブのもとにやってくる)

ヨアブ で、ホシャイ殿が王から伝えるのはどんな知らせだ。

ホシャイ 陛下は殿下にこう命ぜられました。

ウリヤを今すぐ隊からはずし帰国させよ、と。

彼にしてもらうべき役目があるとのことでございます。

ウリヤ 王が癩癩に襲われて、

家臣の忠誠を疑っていなければよいのですが。

ホシャイ いや、むしろウリヤの忠誠がお気に召してのことだ。

ヨアブ さあ、ウリヤを連れて行くがよい、無事を祈るぞ。

[70]

わが主たる王に伝えてくれ。

私はラバの町と戦い、勝利をおさめた、と。⁽²¹⁾

国王のいる場所まで攻め登り、用水と最高の泉のすべてを手に入れた、と。

そしてダビデ王自らこの城壁まで来させてくれ。

連れうる限りすべての兵士たちも一緒に。

そしてこの町をご自身の手柄として手中におさめていただこう。

私がこの町を奪って、民が征服の榮譽を

私の名に与えてしまわないように。

ホシャイ そのように取り計らいます、ヨアブ様。王のために

あなたが掌中におさめた勝利を偉大なるイスラエルの神が祝福してくださいますよう！ [80]

ヨアブ さらばだ、ウリヤ、王のもとへ急ぐのだ。

ウリヤ ヨアブ様がここで勝者たることが確かでありますのと同様、

ウリヤは急ぎ帰還いたします。

([ホシャイとウリヤ] 退場)

アビシャイ ここから降りて宮殿の門を開け、

兵士たちを入れてとりでを守らせよう。

ヨアブ そうするとしよう、アビシャイ——ユダの末裔たちよ、

勇敢にお前たちの勝利を保守するのだ。

(全員退場)

[第3場]

(アムノン、ヨナダブ、エトレイ、アムノンの小姓、登場)

ヨナダブ どうなされたのです、わが主君？ 国王ダビデが愛するご子息よ。

その正統な、勝利の御腕に

王の是認のもとイスラエル軍を掌握し、

その両掌（りょうたなごころ）の食卓の上で
 名誉の宴を繰り広げているお方よ、
 身の毛もよだつ禁欲が食卓につき、
 血の気が失せた頬を餌食にして
 お顔を明るく輝かす、
 血を吸い取るに任せておられるとは。

アムノン おお、ヨナダブ、さように

恋やつれしたように見えるのは、
 我が妹の顔（かんばせ）のかぐわしい美に我が心血を注いでおるが故。
 彼女の美しさは私の心を捕えて
 その心は彼女の満足のために完全に捧げられ、
 今や、彼女の美が生き生きとした我が血流への見張りを立て、
 我が血管を突き刺すような視線で注視しておる。
 妹への愛に比べれば全ては取るに足らぬことと思えるのだ。
 監視の目を逃れて恋に悩む我が頬を元気付けられるものは何一つない。

[10]

ヨナダブ それなら、あなた様の悲しいお顔を彼女の心から解放なさればいい。
 心の赴くまま、彼女を楽しめばよろしいのです。

アムノン どうしてそのようなことができようか、優しき友、ヨナダブよ。

[20]

タマルは乙女、しかも我が妹なのだぞ。

ヨナダブ では、このようになさいます。床に伏せて

熱病で具合が悪いふりをし、
 国王があなた様を見舞いにいらした折に
 ご所望なさるのです。
 あなた様の病に効く食事を作るために妹君をよこして下さいと。
 後に、妹君と二人きりになられた時に、
 力づくにでも男の好き心に物言わせるのです。
 ほら、ご覧下さい。妹君がやってまいります。一緒に入るよう懇願なさるのです。

(タマル登場)

タマル アムノンお兄様は何に苦しんでいらっしゃるの？ そのように青ざめて。 [30]

愛しいお顔の美しさが衰えてしまうほど。

アムノン 具合が悪いのだ、タマルよ。お前の華奢な手で
 上手に料理された食事を摂りたい。

タマル それを王が私めにお命じになられたのです。

私がお兄様の病んだ心に安らぎを与える食事を用意している間、
こちらに来てお休み下さいませ。

アムノン では、行くとする。妹よ、お前の姿を見て心が和んだ。

(ヨナダブを残して全員退場)

ヨナダブ 何故王族が自らの恋心という反逆者に従わねばならぬのか？

王族の力は、命じることができるのに。

情欲が逆らう相手は良心だけなので、

[40]

意志の力で抑制できるはずなのに。

さあ、アムノンよ、愛によってもつれた血の流れを解（ほど）くのだ。

王族の心から勇気を吸い取っていたもつれを。

そして、活気を失った頬へと血を通わせるのだ。

さあ、タマルよ、汝の処女性という木に実って育つ

神聖なる果実は熟し、

イスラエルでの汝の名は腐る。

可哀相なタマルよ、汝の愛らしい手が、

道に外れた愛の力で強化された

アムノンの好色な腕と争う、

[50]

そのような暴力を振るうことになろうとは誰にも予想できなかった。

美しいタマルよ、今や不名誉が逃げる汝を追う、

どんな密かな暗がりを通して逃げてでも追いかけてくる。

汝の恥と裸体とを明るみに出しながら。

エホシバの谷⁽²²⁾から、レバノンの聳える山脈まで逃げ込む場所はない。

そこでは、レバノン杉が激しい怒りで身を震わせて、⁽²³⁾

嵐の中で汝の恥辱の物語を響かせる。

うめきながら大地を根で、

また天をその梢で揺さ振りながら。

雲を打ち、ちぎれ雲を風に飛ばし、

[60]

この驚異を世界中に伝えようとするだろう。

(退場)

(タマルを押しやりながら、アムノン [それにエトレイ] 登場)⁽²⁶⁾

アムノン 床から出て行け。目に入るだけでむかむかする、
熊が吐いたものを見たように。

タマル 妹を無理無体に犯して、終わったら捨てるなんて
道を外れた、王族らしくなく、
男らしくないアムノンお兄様。
恐ろしい罪を犯した上に、
私の恥を暴露して死ぬほど苦しめるなんて。
このような恥辱を、あなたが愛する人に与えないで。
更に罪を重ねることで、あなたの
情が通う心の管を詰まらせないで下さい。

[70]

この二番目の罪は最初の罪をはるかに凌(しの)ぐものです。
アムノン エトレイ、この女をわしの視界から追い出してくれ。
抵抗するようであれば、ドアに門をかけるのだ。

(退場)

エトレイ さあ、こちらへ。さあ、お下がり下さい。
アムノン様にとってあなたは用済み。どうぞお引取り下さい。

(エトレイはタマルを締め出す)

タマル 嗚呼、私は腕組みをして茫然自失のまま
どこに行けばよいの？
あの栄光の土地——
あらゆる喜びが想いの翼をはばたかせ、
喜んでその裸の胸に抱かれ安らいし場所——から追放されたイーブのように、 [80]
ノアの洪水で荒廃させられた、剥き出しで不毛の現世、
稲妻で焦土と化した寂しい森や丘で
死と恥と地獄の苦しみと恐怖と共に住むことになるのだ。
そこを、私は我が父の視野から離れ、彷徨うことになるだろう。
アブサロム、我が兄アブサロム、
そこで、愛しいアブサロムは妹が嘆き悲しむのを聴くことでしょう。
そこで、私は笛のように鳴る嘆きの息で

夜の烏やフクロウをおびき寄せ、脇腹を破らせ、血を流させよう。

その傷を錆びついた刃（やいば）で傷つけ、

激しく脈打つ私の心臓に鳥たちを導きます。

[90]

哀れな女よ、汝は何故語るのだ？ その行為をなされないままにして。

（アブサロム登場）

髪をかきむしり、衣服を引き裂け。その心は

千もの悲しみで溢れ、内側の激しさで張り裂けておりますゆえ。

それらの悲しみを、不浄の扉である脛から散らすのだ。

アムノンの歪（いびつ）な残酷さとタマルの貞操が損なわれる悲劇に形を与えるために。

アブサロム どうしてタマルはこんな大声で叫んでいるのだ？

タマル タマルが明かすことを恥じるような理由から。

アブサロム 打ち明けてくれ、お前の兄が復讐してやろう。

タマル 私たちの父の息子であるアムノンが私を襲ったのです。

[100]

その上追い出して、イスラエルの物笑いの種にしたのです。

アブサロム アムノンが襲っただと？ ダビデ王の手にかけて、

それに、神がダビデ王と交わされた契約にかけて、

アムノンにはその暴力を地獄まで持って行かせよう。

天に対する謀反人、ダビデ王の玉座に対する謀反人、

アブサロムとイスラエルに対する謀反人に。

この犯行は、ヤコブの支配者である神が天から、

煙の雲、塔のように立ち上る火柱越しにご照覧あったはず。

奴が緑の平原を誇らしげに駆け巡る時に、

その戦車の車輪を激しい風で引きちぎり、

[110]

奴の身体を血の海に投げさせてくださるだろう。

雷神には奴目がけて雷霆（らいてい）を放ち、

輝く炎の羽根を持つその連れ合いには

奴の憎むべき骨の上に座らせ、永遠にその身を焼かせよう。

私自身はと言えば、雷神とその連れ合いと同じくらいすばしく

好機を狙うとしよう。憎しみを隠しつつ。

不実なアムノンに、非業の最期をもたらすべく――

お入り、妹よ。我が家で休むがよい。

神は時が来れば汝から恥を取り去ってくれよう。

[120]

タマル 神も、時も、私のためにそんなことなどなさないでしょう。

(アブサロムを残してタマル退場)

(ダビデが従者たちとともに登場)

ダビデ アブサロムか。こんなところに独りでどうした？

そんな不機嫌そうな顔をして。

アブサロム れっきとした理由があればこそ、不機嫌にもなり、

疼く怒りを胸に包みかくしているのです。

ダビデ そなたが誰に対して腹を立てねばならぬのか？

アブサロム 邪なアムノンめにです。父上の罰当たりな息子、

私にとっても、麗しいタマルにとっても異母兄弟、

継母の息子とはいえ、あくまでもわが肉親。

あいつが聖なるダビデ王の名誉を汚し、

その玉座に淫らな穢れを染みつかせたのです。

[130]

病をよそおって、わが妹タマルを力づくで犯したのです。

もとをたどれば忌わしい情慾に駆られてのこと。

ダビデ アムノンめが、かくのごとき罪悪をわが家にもたらし、

罪が父の肉体を責め苛むにまかせたというのか？

厳罰だ、ダビデよ、神の審きの声にも増して容赦ない罰に処すのだ。

憎しみの炎を胸に燃やせ。

怒りに響めた眉のアーチを戴く眼にも怒りの炎を燃やし、

額を禍々しい帯星のように輝かせ、

お前の顔を見た罪人アムノンを震え上がらせるのだ。

罪が、七重の王冠を戴き紫のローブを身にまとして、

[140]

わが破戒の王座を征服して凱旋式をはじめている。

王座に即いた罪は百の目を光らせて、

私たちが束の間まけたり淫らな思いを抱いたのさえ見逃さず、

脆き人間の願望からこしらえた餌を釣針に仕掛けて、

私たちの魂を釣り上げては地獄に落とすのだ。

しかし、私はこの王国の守護神の精霊の力添えを得て、

この甘言を弄ぶ暴君を王座から追い落としてみせる。

罪に囚われた奴隷どもを鉄の笞(しもと)と鋭い鋼の棘で苛み、

わが神聖なる宮廷から追い払おう。

だから、アブサロムよ、お前はこの罪への復讐を差し控え、
私に任せてくれ。私がアムノンを懲らしめるから。 [150]

アブサロム わかりました。それでは、陛下、
ハツォルの野で催される羊の毛刈り祭に、
王族たち全員を率いてご臨席を賜りたく存じます。

ダビデ それはだめだ。私が王族を皆連れて行幸すれば、
過大な出費をお前に強いることになる。幾人かの王族は行かせるから。

アブサロム お言葉ですが、どうか御自らお出ましく下さいませ。
季節も佳く、きっとお心に適いましょう。

心地よい夏が、葉陰のローブを身にまとい、
バラと庭の花々でこしらえた冠を戴いて、 [160]
ニンフたちを一人残らず従え、陛下をおもてなしいたしましょう。

夏の精たちは、わが緑なす木立から

陛下の胸に甘露を撒き、

陛下のお頭（つむり）に香油を滴らせましょう。

ですから、どうか願いをお聞き届けくださり、お出ましを。

ダビデ アブサロムよ、私はここに留まるということでは
得心し、王族たちを同行して参るよう。

アブサロム お気に入りのアムノンは行かせますか？

ダビデ どうしてアムノンを同行させる必要があるのか？

アブサロム 息子である私の日頃の忠勤に免じて、どうか。 [170]

ダビデ アムノンを他の王族たち全員とともに同行せよ。

他でもないアブサロムの願いであるから、聞き届けることにしよう。

(ホシャイ、ウリヤ、その他登場)

ホシャイ 陛下、臣下のヨアブがシリアとの戦から、
ウリヤを帰還させさせていただきます。

ダビデ よく帰った、ウリヤよ。シリアとの戦から帰還した
この最愛の家臣を歓迎するぞ。

ウリヤ イスラエルの神と陛下の仁愛に感謝いたします。

陛下から直々にご挨拶を賜るとは。

ダビデ ダビデが選ばれてイスラエルの聖なる王座に
君臨している限り、これに劣った歓迎の挨拶で [180]

ウリヤを迎えることはないであろう。

ウリヤよ、わが家臣ヨアブのことを聞きたい。

忠義を尽くしてこの聖戦を戦っておるか、

神に香油を注がれ聖められし王の誉れのために？

ウリヤ ヨアブ殿は、神によって嘉（よみ）されし戦を

忠実かつ立派に戦い、大勝利をおさめておられます。

我らの主君が崇める神の御業によって、

アンモン人の邪悪な王を相手に、

ラバの街を包囲し、泉の宮を

管理下に置きました。そこから水道が幾筋も伸びており、

アンモン人たちにとって喜ばしき水源となっているのです。

従いまして、ヨアブ殿の願いは、偉大なる陛下に

イスラエルの軍を閲兵していただきたく、

御自らラバの街にお出ましあそばされたいということでございます。

ラバの征服が名実ともに陛下の偉業となり、

ヨアブ殿はその手足として戦ったに過ぎないということになりますように。

ダビデ 神の御加護とヨアブの果敢をもってしても、

ウリヤの武勇を抜きにしては、絶対に成し遂げられなかった勝利だ。

ヘテ人として生まれたが、帰化して、⁽²⁵⁾

イスラエルの息子として受け入れられてこのかた、

お前はまるで、神が操る両腕で、

イスラエルの怒りで研ぎすました剣を振るうがごとき闘いぶりだ。

だから、家に帰って休むがよい。

奥方と一族郎党のもとに戻って楽しむがよい。

勝ち戦から凱旋した王の寵臣が、戦いを終えて

楽しむのは恥ずかしいことではないのだから。

ウリヤ 陛下の下僕の身体はまだ半分も弱っておりません。

わずかな働きで元気をなくし、

腑抜けのようになって、家に逃げ帰ろうとするような、

そんな柔（やわ）な生まれつきではございません。

また、好き心にそそのかされて、

入神の一撃でぐるりを敵の亡骸で

埋めつくす必殺剣を放り出し、

淫奔な女房の豊かな胸を一目散にめざすような性根でもありません。

[190]

[200]

[210]

ダビデ　　ウリヤの奥方は美しく落ち着きがあるが、
 若くて、男好きのする肢体つきをしておる。
 だから、せっかく王が戦地からそなたを呼び戻したのに、
 不人情にも奥方と床をともにしようとせぬとすれば、
 仮にバテシバが、女の脆さから、評判を損なうようなことをしでかしても、
 罪はむしろ夫ウリヤの側にありとされかねんぞ。 [220]
 だからウリヤよ、帰って奥方と心ゆくまで睦みあうがよいぞ。
 神によって結ばれた伴侶ではないか。伴侶を失う不安には恐れおののかねば。

ウリヤ　　陛下、私の安楽をお考え下さるのもほどほどで結構です。
 神の箱とイスラエルとユダが宮殿や壮麗なる大天幕の中で安泰である一方、⁽²⁶⁾
 ヨアブ殿とその弟君は戦場で、
 冬の厳しい寒さにも夏の照りつける太陽にも耐えておられます。
 それなのに、このウリヤがご馳走をむさぼり、
 神からの任務を蔑ろにして、ヨアブ殿達より不名誉を曝してよいものでしょうか。
 陛下、あなた様の魂に命があるのと同様に確かなこととして申し上げますが、
 聖なる勤めが私を戦へと呼び起こしているときに [231]
 私の耳がそのような快樂に傾くことは決してありません。

ダビデ　　それならば、ウリヤの雄々しい心が満足するようにするがよい。

お前の名声がイスラエルで最も輝くように。

ウリヤ　　これでウリヤの心も満たされます。

あなた様が私をヨアブ殿の軍に送還するまでは、

陛下の館の前に広がるこの大地が (横たわる)

私の臥所となり、疲れを知らないこの腕が

兵士の頭を休めるにほどよい枕となりましょう。

ヨアブ殿が大勝利を収めるまでは [240]

決して自宅で休まないと密かに誓願を立てたのですから。

ダビデ　　では、誰か、最上級のワインを持ってきなさい。

我々の屈強な友の一時帰還を歓迎し、

これまでの彼の幸運と

今後の武勇がもたらす名誉に乾杯しようではないか。

その後彼をラバの包囲に送り返し、

私はイスラエル軍と共に後を追うとしよう。

(一人の従者がワインの瓶を何本か持って登場)

立て、ウリヤよ。こちらへ来て王のために乾杯しなさい。

ウリヤ　ダビデ王が、私をそのような誉れにふさわしいものとお考え下さるならば、
(立ち上がる)

不遜ながらも、陛下に乾杯させていただきます。 [250]

ダビデ　アブサロムとホシャイも、

この良きウリヤの幸運を願って乾杯しなさい。

アブサロム　喜んで、陛下、ウリヤを歓迎するために。

ダビデ　私から始めよう。ウリヤよ、お前自身と
アンモン人の財宝に乾杯だ。

その財宝のことごとくをお前に分け与えよう。

この杯を飲み干すことで今の約束に判を押すぞ。 (飲む)

ウリヤ　陛下のお目にかなう事なら何でも、

このウリヤ、死ぬまでやり尽くす所存です。

ダビデ　さあ、彼に酒をつけ。

([ウリヤは杯を飲み干す])

さあ、続け、

[260]

王の健康を願う者達よ、彼のように飲み干すのだ。

アブサロム　ダビデ王を愛さず、王の命令を蔑ろにするようならば、

その人はイスラエルでは衰退し、生きていけなくなるでしょう。

ウリヤよ、アビシャイの健康を祝して乾杯だ。

ヨアブの弟でお前のことを想う友人でもあるからな。 (飲む)

ウリヤ　では、アブサロム殿とアビシャイ殿の健康に乾杯。 (飲む)

ホシャイ　ウリヤよ、私はヨアブの健康と、

我々がラバの包囲に戻る際の

愉快的な旅路に乾杯だ。 (飲む)

ウリヤ　ホシャイ殿、心からあなたのために乾杯します。 [270]

酒をくれ、王の召使い達よ、酒を注いでくれ。 (飲む)

ダビデ　いいぞ、ウリヤよ。飲み干すのだ。

お前が存分に飲めばダビデを喜ばせるのだ。

ウリヤ　飲ませていただきます、陛下。

アブサロム　ウリヤ殿よ、俺にもひとつ乾杯してくれ。

ウリヤ　いいや、すまんが俺は陛下に乾杯する。

あなたたちより父親である陛下の方が価値があるからな。

ダビデ そうしなさい、ウリヤ。私も返杯するぞ。

ウリヤ 本当に、陛下、たまにはこんなに

大胆になるのもよいものですね。

ダビデ 彼の杯を満たせ。

ウリヤ 杯を満たしてくれ。

(杯を渡す)

ダビデ 早く注ぐのだ。

ウリヤ 早く注ぐのだ。さあ陛下、ご好意に甘えて

陛下に乾杯しますよ。

(飲む)

ダビデ ウリヤに返杯するぞ、間髪おかずに。

(ダビデも飲む)

アブサロム さあ、ウリヤよ、次はもう一度私のために、

そしてダビデ王の子供達の健康に乾杯してくれ。

ウリヤ ダビデ王の子供達だと！

アブサロム そうだ、ダビデ王の子供達だ。俺に乾杯してくれるか？

[290]

ウリヤ 俺に乾杯してくれるかだと！

アブサロム 乾杯しろ、でなければお前は俺達を愛していないのだ。

ウリヤ なんだと、議論するのか？説教か？もうたくさんだ。俺はここに寝る。

ダビデ ウリヤよ、むしろ家に帰って寝なさい。

ウリヤ いいえ、陛下、私に誓いを破れとおっしゃるのですか？(横たわる)

家だと！いいえ、絶対嫌だ。俺は兵士らしく腕枕で寝るのだ。

イスラエルに生きている限り、男らしく寝るのだ。

ダビデ (傍白) どうしても彼の妻の評判を守る手がないなら、

[300]

彼を送還する際にヨアブ宛の手紙を託し、

ウリヤを戦の前線に派遣させよう。

私のもくろみが実現するように。

—さあ、彼を中に運び入れるのだ。

(ダビデとアブサロム退場)

ホシャイ さあ、起きろ、ウリヤ。中に入って休め。

ウリヤ 家には帰らんぞ。家は退屈だ。

ホシャイ だからこちらへ来てダビデ王の館で休むがよい。

ウリヤ 前でよい、諸卿、館の前でよい。

(退場)

コーラス登場

コーラス ああ、思い上がった男の傲慢な逆が
 罪の首から馬勒を外し、
 彼を墓穴の向こうの地獄へ運び込まんとしている。
 その恐ろしい鳴き声で我々に死の恐ろしい呼び出しを届け、
 破滅をもたらすあのガラスが、
 アラビアの香ばしい薬味貯蔵庫や
 麗しい庭や、心地よい園の上を
 耳障りな声を立てて呪うかのように通り過ぎ、
 激しい飢餓感を覚えて、忌まわしい腐肉の上めがけて
 舞い降りる。

[10]

そのように、卑劣な男は、自分の魂を
 生き返らせるような風味をもたらす喜びには背を向け、
 激烈で歯止めの利かない喉の渴きを感じて
 忌まわしい肉体が食欲に求めるものを追求する。
 もし聖なるダビデ王がそのようにして罪と手を結ぶなら、
 我々下々の者は何を誇りとすればよいのか。
 王が自分の欲情に手綱を委ねてしまえば、
 なお大きな災いの続きを招くのみ。
 ウリヤは戦争の前線で
 憎むべき異教徒の剣に倒され、
 ダビデは愛しいバテシバを妻とします。
 以上のことが起こったとお考え下さい。そして二人に子供が産まれますが、
 その子の死を、預言者が粛々と嘆きます。

[20]

(退場)

[第4場]

(バテシバ、侍女とともに登場)

バテシバ 悲しめ、バテシバよ。お前の愚かさを嘆け、

お前の罪、お前の恥辱、お前の魂の悲しみを嘆け。
罪と、恥辱と、悲しみが、お前の魂のまわりに群がる。
そしてお前の心の門と入口には、
悲哀が腕組みをして、その不平をたれこめさせている。
慰めは、十本の弦を張った堅琴からも、
鈴のように鳴るシンバルからも、象牙のリユートからも得られない。
また王ダビデの堅琴の音色も、
バテシバの打ちひしがれた心を楽しませてはくれない。
エルサレムはお前の悲嘆の声で満ち、 [10]
シオンの通りには、お前の悲哀が座している。
幼子は病んでいる。死ぬばかりに病んでいるに違いない。
お前によってダビデの家に生まれたあの実りの子が。
蜜の壺も、油の壺も、
ダビデを喜ばせず、またそのはしための表情を明るくはしない。
ウリヤよ —— このことを考えるのは何と悲しいことでしょう。
人々の子らのうちで、
私の魂に向かって「王は罪を犯した。
ダビデは間違いを犯した。そしてバテシバは、
ウリヤの生命に死の罾を仕掛けた」と言わぬ者があるか。 [20]
私の愛しいウリヤ、あなたは罾に陥り、
あげくは地獄の門まで行ってしまったのです、
このバテシバのために。そしてあなたは、妻の恥辱を隠してはくれない。
ああ、王たちの欲望に奉仕するとは、何ということだろう！
私たちが抵抗すると、彼らはなんと獅子のように怒り狂うことか！
でもバテシバよ、謙虚な心をもって待ち望め、
神の御心が、そのはしために送られる恩恵を。

(退場)

[第5場]

(ダビデが外衣をまとい、悲しそうな足取りで登場)

ダビデ [傍白] 幼子が病んでいる。そしてダビデの心も痛む、
 罪の無い幼子が罪の苦しみを背負っているのを見ると。
 ダビデよ、お前の豎琴を弾くのをやめよ。お前の頭を垂れよ。
 お前の象牙のリュートを岩に叩きつけよ。
 ヘルモンの丘の上に降りる露は、
 シオンの頂にも、高い塔にも降ってはこない。
 ガテヤ、アスケロンの平原は喜ぶのに、
 ダビデの心は、愁いのうちに憔悴する。
 幼子が病んでいる、かわいい幼子が。バテシバが
 陣痛をもってイスラエルに生んでくれたあのかわいい幼子が。――

[10]

(ナタン登場)⁽²⁹⁾

ところで、ナタンは、お前の主である王に、どういうことを言おうとするのだ。
 ナタン ナタンは、主である王に次のことを申し上げます。

ある町に、二人の男が住んでおりました。

一人は有力者で、とても裕福で、

雄牛や羊や野の家畜をたくさん飼っていました。

もう一人は貧しくて、雄牛も子牛も持たず、

一匹の小羊のほかには、何の家畜も持っていませんでした。

彼は、その小羊を買い、それからずっと手塩にかけて育てていました。

小羊は次第に大きくなり、彼やその家族と共に食物を与えられ、

彼やその家族と同じように食べたり飲んだりし、

彼のふところに抱かれて眠り、彼にとっては

まるで自分の娘、最愛の子供のようでした。

さて、この裕福な男のところに一人の旅人がやって来ました、

ところが彼は、自分の家畜を屠ることも、

また自分の家畜を調理することも、彼に食事を供することも拒み、

貧しい男の羊を、彼の所有であるにもかかわらず、捕らえ、

自分の家に来たこの旅人のために、それを調理したのです。

このことについて、この男には、いかなる処置がなされるべきでしょうか。

ダビデ そうか、主は生きておられるのだから、この邪悪な男は

裁かれて、死なねばならぬ。

[20]

[30]

あの貧しい男に、4倍もの物を償わなければならぬ、

情け容赦なく子羊を取ったこの男は。

ナタン あなたがその男なのです。そしてあなたは、自らご自分を裁かれました。

ダビデ王よ、主なるあなたの神は、私をとおしてこう言われます。

私はお前に油を注いで、イスラエルの王とした、

そして、サウルの圧政からお前を救った。

お前の主人サウルの家を、私はお前の所有として与えた。

私は、彼の妻たちをお前の胸に抱かせ、

その上ユダもエルサレムも与えた。

そして、お前も知ってのとおり、もしそれでも足りなければ
もっと多くのものを与えたであろう。 [40]

なぜお前は、そのようにも正道を外れ、

悪をなし、私の目の前で罪を犯したのか？

お前はウリヤを剣をもって殺した。

そうだ、割礼を受けない者たちの刃をもって、

お前は彼を斬り殺したのだ。それゆえ、今日からは

剣が、お前からもお前の家の者からも離れることはない。

お前は、このヘテ人の妻をとって自分のものとしたからだ。

それゆえ、見よ、とヤコブの神は言われる、

私はお前自身の家で、お前に災いをもたらそう。 [50]

そうだ、お前の目の前で、お前の妻たちを取り上げ、

彼女たちをお前の隣人の所有として与えよう。

このことは、白日の下で、お前に対してなされるであろう、

イスラエルがダビデの恥辱をはっきりと見ることができるよう。

ダビデ ナタンよ、私は主に背いた、私は主に対して

罪を犯した、おお、甚だしい罪を犯した。だから見よ、

天が与えて下さった王座からダビデは身を投げて、

地獄の門に向かって、呻きながら這っていくのだ。

(彼は倒れる [ナタンは彼を起こす])

ナタン お起きなさい、ダビデ王よ。主は私をとおしてこう言われます。

ダビデ王を生かしおくことにする。私はお前の心の [60]

真実の悔い改めの悲しみを見たからである。

しかしお前は、お前のこの不品行によって

イスラエルの敵を奮い立たせて
 勝利させ、万軍の神を冒瀆させた。
 神は、神が愛する民、神のすべての部族の上に
 邪悪な人間を立てて支配させた、と言われている、
 それゆえ、先ごろ生まれた子は、間違いなく死ぬであろう、
 その子の母の罪ゆえに、その子の父王の侮りのゆえに。

(ナタン退場)

ダビデ ヤコブの神は、そのすべての御業において、いかに正しい方であろう！
 しかし、ダビデが愛してやまぬあの子は、死ななければならぬのか？ [70]
 ああ、イスラエルの力強い神は
 その宣告をお変えにならず、その幼子は死なねばならぬ、と言われるとは！
 悲しめ、イスラエルよ、そしてシオンの門のそばで涙を流せ。
 枯れよ、お前たちレバノンの杉よ。
 頭頂に花を咲かせる、伸びゆくアーモンドの木よ、
 ヘブロンの恐ろしい流れにうなだれ、溺れ、そして水浸しになれ。
 ダビデに生まれた幼子は、死なねばならぬのだ、
 その子の母の罪ゆえに、その子の父王の侮りのゆえに。

(ダビデは悲しい面持ちで座す)

(ホシャイ登場)

従者1 ホシャイ殿は陛下の元へ何の知らせを持ってこられたのですか。
 ホシャイ ダビデ王宮に仕えるそなたへ [80]
 ホシャイはこの知らせを伝える。すべて預言者の語ったとおりにになった。
 主は確かにダビデのお子を打ち、死なせた。
 その子はウリヤの妻が産んだ赤子だ。
 アンモンの子孫たちによって殺された今は亡きウリヤの。
 従者1 ホシャイ殿、お静かに。王はひどくお苦しみになっておられる。
 この知らせを最初に伝える者はどのように話せばいいというのか、
 お子がまだ存命であったときにわれわれが語りかけても、
 ダビデ王の心をお慰めできなかったというのに。

ダビデ　ダビデの心が慰められないだと？

王の従者たるお前たちは何を囁いているのだ？

[90]

ホシャイが王にどんな知らせを告げるというのだ？

ホシャイ、言うのだ、わが子は生きているのか、死んだのか？

ホシャイ　お子は亡くなりました。ウリヤの妻に

ダビデ王が生ませたお子は。

ダビデ　ウリヤの妻！そなたはそう申すのか？

わが子は死んだ。ではダビデの恥もこれで終わりだ。

食べ物を持ってくるのだ。酒も飲むからくれ。

身の汚れを洗う水も、曇った顔を明るくする油もだ。

ショームもシンバルも笛も持ってまいれ。

ダビデのハープとリュート、それを奏でる手とダビデの歌声に

イスラエルを愛する方への賛歌を捧げさせ、

ダビデの名声をお守りくださる方へ称賛の歌を歌わせてくれ。

[100]

ダビデの罪をその目の届かぬところへ隠し、

ダビデの恥をガテの町へ送り放ってくださった方へ。

赤子の母をわが元へ連れてきてくれ。

私はその顔から涙をぬぐい去り、

わが手で彼女に慰めを与えて、

美しいバテシバを装飾品で飾りたい。

そうして彼女が私に新たな息子を産んでくれ、

その子が万軍の主、エホバに愛される子になってほしいのだ。

あの子の逝った場所にダビデは抗うすべもなく行かねばならないけれども、

ダビデがいる場所へあの子が帰ってくることは決してないのだから。

[110]

(水、酒、油、楽隊、食事が運び込まれる)

([バテシバ登場])

美しいバテシバ、座ってくれ、もう嘆くのはやめなさい——

さあ、王に仕えるお前たちは歌を歌い、音楽を奏でよ。

こうして死者とともにダビデの悲しみは眠り、

バテシバはイスラエルに生きるのだ。

(従者たちは皆でさまざまな儀式を行なったり、歌をうたったりする)

さあ、すぐに襲撃のための武器と兵器を準備するのだ、

イスラエルの兵士たちよ。

ユダとエルサレムの兵士たちよ。

王にラバの町を奪わせてくれ。

ラバがヨアブの名で呼ばれ、

ダビデの栄光がシオンの町に輝かないなどということにならないように。

[120]

ラバをめざし、ダビデは臣下とともに進軍する、

アンモンと悪辣な奴らを懲らしめるために。

(全員退場)

[第6場]

(アブサロムほか2、3人登場)

アブサロム 驃馬の準備を整え、食べ物を十分与えてから

宴で兄たちに会うとしよう。

この宴の主人は忌まわしい奴だ。

イスラエルの家に泥を塗り、

妹を中傷させ、母に恥を与えた。

奴にも恥を与えねばならぬ、

タマルを凌辱し、その直後に家からタマルを追い出して

恥をかかせるような悪事をはたらいて、

その不正に見合う報いを受けさせずにおけようか。

だからこそ、このアブサロムがお前たちと共謀し、

[10]

アムノンが食卓についたその時に死なせてやるのだ。

タマルを凌辱した奴の非道に復讐してやると

聖なる神殿で誓ったのだから。

奴がやってきた。みんな、奴と穏やかに話すのだぞ。

奴の死は私の心に深く刻み込んである。

(アムノンがアドニヤとヨナダブを伴って登場)

アムノン われわれの毛刈り人たちはここから遠くないところにいるはずだ。

アムノンはあなたがた兄弟全員を歓迎する。⁽²⁸⁾

かつてわれらの先祖たちがユダヤエルサレムでつねにしていた歓迎と同じように—

とはいえ、アブサロム殿、そなたはとりわけ歓迎する。 [20]

そなたこそそなたの家と子孫の誉れだ。

座るがよい、ダビデ王の息子たる私と食事をともにしてくれ。

美しい若者だ。その髪はまるでダビデ王の象牙のリュートに張った
金色の弦のごとく、わが目に輝いて映る。

アブサロム アムノンよ、毛刈り人たちと従者たちはどこにいる？

彼らがいれば、酒をたっぷり注ぎ、

ヤギの乳を味わい、あなたとともに楽しめるだろうに。

アムノン さあ、アムノンの毛刈り人と従者たちが参った——

アブサロム、座って私と楽しもう。

(羊飼いの一団が登場し、踊り歌う)⁽²⁹⁾

イスラエルをほめたたえて飲むがよい、アブサロム。 [30]

ダビデの宮からアムノンの牧場へようこそ。

([アブサロムがアムノンを刺す])

アブサロム その酒の一飲みとともに死ぬがよい。死ね、呪われて死ぬのだ。

われわれすべての名誉を汚したお前、

タマルに行なった悪事のゆえに死ね。

ダビデ王の息子としてふさわしくない奴だ。

(アブサロム [従者たちとともに] 退場)

ヨナダブ ああ、アブサロムはタマルのためになんということをしてしまったのか、

偉大なるダビデ王の息子たる兄を殺してしまうとは！

アドニヤ ヨナダブ、逃げろ、そして今アブサロムがあらわにした

残酷さを知らせるのだ。

アムノンよ、弟であるこのアドニヤが [40]

死者たちの骸のなかにあなたの亡骸を葬りましょう。

さあ、われわれはアムノンの死とアブサロムの慢心について
イスラエルに申し立てようではないか。

(全員退場)

[第7場]

(ダビデがヨアブ、アビシャイ、ホシャイ [とその他の者たち] とともに登場。
陣太鼓を鳴らし、旗を翻す彼らはラバの町と戦っている)

ダビデ　ここは割礼を受けていない異教徒の町、
まさにここが都市王国ラバ、悪辣なハヌンが王として玉座についている。
この王から、このハヌンから、その王冠を奪え。
そうしてラバの町の住民を絶やすのだ。
彼らの血と殺された者たちの殺戮にこそ、
ダビデ一族の名誉が存するのだから。
ヨアブ、アビシャイ、そして他の者たちも、
偉大なるエルサレムのために今日を戦うのだ。

(ハヌンとその他の者たちが城壁の上に登場)

ヨアブ　ご覧下さい、ハヌンが城壁の上に姿を現しましたぞ。 [10]

さて、それでは、攻撃を仕掛けようではありませんか。
イスラエルは異教徒の娘たちを征服するのです。
左様に定められているが如く。
ダビデ王よ、全ての指揮をお執り下さい。

ダビデ　ハヌンよ、私が言うことをよく聞いて、肝に銘じるがよい。

かつて私の若い兵士たちはギベオンの池の側で、
イシボセテの軍勢に挑み、⁽³⁰⁾
12対12の真剣勝負を行った。

我が軍勢をお守り下さった神が生きてあられる以上、
貴様と貴様の部下たちが、この日、 [20]
イスラエルの剣の凄まじさを思い知るのも、また確かなことだ。
というのも、貴様はイスラエルの神に挑み、

ラバがペリシテ人とぐるになってベンヤミンの民を罵ることを許したのだから。⁽³¹⁾

ハヌン よく聞け。貴様の父サウルは

山頂で脇腹を刺し貫かれて倒れた。

また、ヨナタム、アビナダブ、メルキスアは
アスカロンの谷を自分たちの血で染めたではないか。

その血は、ギルボア山より発し、

ジフの荒野を通り、数々の河川となって流れて行ったのだ。

[30]

割礼を受けていない我が民の剣が

たらふく酔うほどイスラエルの血を吸った時に。

それと同じように、ダビデには部下ともども、

ハヌンが治める街ラバの城壁の下で死んでもらおう。

ヨアブ ハヌンよ、イスラエルの神は、こう仰られた。

ダビデ王に貴様の王冠を被らせよう、

純金で1タレントの重さがある、その王冠を、と。

そして、ハヌンの街を奪う大勝利を収めさせよう、と。

その時、イスラエルはそこから貴様の人民どもを追い出し、

大人であれ、子どもであれ、レンガを焼く窯へと向かわせ、

[40]

鉄製の碎土機にかけて圧死させ、

その骨を斧で叩き潰し、肢体は鉄の剣で

真っ二つに割られることになるだろう、と。

ハヌンよ、その様なことが貴様と貴様の部下たちの身に降りかかるのだ。

というのも、貴様はイスラエルに戦いを挑んだのだから。

武器を取れ、武器を。ラバが復讐を思い知るように。

ハヌンの街を、ダビデ王の戦利品にしてくれようぞ！

(警報、出撃、急襲、全員退場。それから、喇叭の吹奏があり、ハヌンの王冠を被ったダビデが [ヨアブその他の者たちと共に] 登場)

ダビデ 今や、武器がガチャガチャとぶつかる音、戦の怒りの嵐が

破壊されたラバの塔の上で轟いている。

あの偉大なエホバの腕、その復讐の怒りが、

[50]

エホバの民たちに城門を破らせ、

天使たちに、燃え立つ上着を着せ、

悪辣なハヌンの街と戦わせたのであった。

お前たち、ユダの者どもよ、ダビデ王に礼を言うのだ。

それに、イスラエルをここまで高めてこられ、

ダビデ王にこの王冠を授けられた

シオンとエルサレムの神にも。

ヨアブ 諸々の種族の中にあつて、ダビデこそ、美しく輝いておられるお方。

その様子は、輝く外衣（ローブ）をまとった太陽が

東の門から跳りながら出て、

新郎の様に浮き浮きした調子で

その眩い光を暗い大気にパッと放つ時のよう。その様に、ダビデ王は見える。

敵の街を手中に収めた名誉を頭にいただき、

天空の様に豊かに輝いておられる。

星を散りばめたその蒼穹は、この地球の上に広がっている。

その様に、イスラエルのダビデ王は見える。

アビシャイ ヨアブよ、何故ダビデ王は玉座に登らぬのか。

天がハヌンの王冠で美しくされたお方なのに。

喇叭、ショーム、それに賞讃に似つかわしい楽器の数々を奏でよ。

ダビデの勝利に味方したイスラエルの神を賞讃するために。

[60]

[70]

（〔楽器が演奏される。〕ヨナダブ登場）

ヨナダブ 何故イスラエルの王は歓喜しておられるのか。

何故ダビデがラバを統治する王冠をいだいて座っておられるのか。

見よ、アムノンの地に、アブサロムの悪事によって

大災禍が降りかかってしまった。

アムノンの羊毛刈り人たちと彼らの歓喜の宴を

アブサロムが自らの剣でひっくり返してしまった。

ダビデ王の王子たちは誰一人

生きて王のもとにこの苦々しい知らせを持ち帰るものはいない。

ダビデ 嗚呼、ダビデの勝利が打ち砕かれるのは何と早いことか！

何と急に、ダビデの誉れは下に傾いてゆくことか！

日の光が西に沈む、

ちょうどその様に、ダビデの栄光と名声の輝きが翳ってゆく。

ダビデよ、死ぬがよい。汝にはイスラエルで汝の名声を甦らせることのできる

[80]

子孫は誰一人残されていないのだから。

ヨナダブ イスラエルに、ダビデのご胤裔（いんえい）は生きておいでです。

（〔ダビデの〕他の息子たちと共に、アドニヤ登場）

陛下を慰めて差し上げて下さい、王に仕えるあなた方よ――

ご覧下さい、あなたのご子息たちが悲しい服を着て

戻ってまいります。アブサロムが殺したのは、アムノン一人だけでございます。

ダビデ よくぞ戻ってまいった、我が息子たちよ。お前たちは

この黄金の王冠やハヌンの戦利品よりも価値がある。

[90]

おゝ、では話してくれ、我が息子たちよ、

どのような成り行きでアブサロムは

兄アムノンを自らの剣で殺めるに至ったのだ？

アドニヤ 嗚呼、王よ、あなたの王子たちはアムノンの野に赴き、

アムノンと一緒に宴を楽しんだのです。パンとワインを食しながら。

アブサロムは騾馬に乗ってやって来ると、

部下にかように命じました。「アムノンが上機嫌になって油断したら、

その時、アムノンに打ちかかり、亡き者とするのだ。

というのも、奴は無理やりタマルを手籠めにし、

用済みとなると毛嫌いして戸口から追い出したのだ」と。

[100]

そして、彼は実際そうしたのです。彼らはアブサロムと示し合わせ、

あなたの息子アムノンに襲いかかって殺し、タマルの仇を討ったのです。

ダビデ いつまで、ユダとエルサレムは嘆き、

シオンをその涙で水浸しにすることだろう！

いつまで、イスラエルはアムノンの死を無為に嘆き続けることか。

屈強な者の誰一人、

ダビデ王の心の嘆きを聞く者はいないだろう。

アムノンよ、汝の命は我が慰みであった。

ちょうどリュートの音色が、あるいはダビデがハーブに合わせて歌う小唄が、

我が耳にそうある様に。

[110]

アブサロムは我が心の楽しみを奪い去った。

今は悲しみで乱れている我が心から。

（ダビデを残し、全員退場）

(テコアの寡婦登場。[彼女は跪く。])⁽³²⁾

テコアの寡婦　ダビデ王万歳。イスラエルの王様万歳。

どうか陛下の御ために、シオン（エルサレム）の城門に神の祝福を。

ダビデ　女よ、何を嘆いているのだ？ 立ち上がって申してみよ。

いかなる悲しみがそなたの心に降りかかっているのか。

([テコアの寡婦立ち上がる。])

テコアの寡婦　陛下のはしためは心を傷めております。

その胸の痛みは堪え難く、

はしための分際で、テコアよりまかり越した次第でございます。

ダビデ　テコアの女よ、申してみよ。

[120]

何を思い悩んでいるのか。何があったというのか。

テコアの寡婦　私めはテコアに住む後家でございます。

息子が二人おりました。それが陛下、兄弟同士、

野原でいさかいを起こし、仲裁してくれる者もいなかったため、

一人がもう一人を打ち殺してしまったのでございます。

するとどうしたことでしょう、親戚たちが集まって、

兄弟を打ち殺した息子を声高に詰り、

そんなことをするやつは死神の申し子かも知れぬと言うのです。

「お前の跡継ぎ息子だが、追いつめて殺すのだ」とか。

残された命の火を消し、

[130]

この地上から、私めと亡くなった主人の

家名も血統も絶やしてしまおうという魂胆なのです。

ダビデ　女よ、帰るがよい。故郷の家に戻るがよいぞ。

そなたの息子に手出しはならぬと命令を出してつかわそう。

不平を申す者があれば、

私のもとに連れて来るがよい。懲らしめてやろう。

主が在らせられる限り、そなたの息子の髪の毛一本たりとも

地に落ちることはないのだから。

女よ、復讐は神にのみ属す行為なのだ。

それなのに、そなたの息子を罪科ゆえに殺すだなんて。

[140]

テコアの寡婦　陛下は、私のごときははしためにご立派なお言葉をくださいました。

しかしでございます、それならば、なにゆえに陛下は、
正義の民の意向に断固反して、
追放者を追及するという無情な役柄をお演じになるのです？
復讐は神にのみ属す行為だとおっしゃるのに。
陛下のお言葉がご自身のふるまいと食い違っていることは確かですから、
追放された方を、お呼び戻しあそばせ。
若君が生きて帰国なさり、イスラエルの地で陛下のために
子孫を生（な）すことができるように。

ダビデ　テコアの女よ、答えてくれ。

[150]

私がこれから尋ねる一つの質問に答えてほしい。

この仕業はヨアブの差し金ではないか？

どうだ、裏で糸を引いているのはヨアブであろう？

テコアの寡婦　陛下、確かに仰せの通りでございます。

陛下の軍の指揮官でいらっしゃるヨアブ様が
申し上げるべき言葉を私めの口に授けたのでございます。
陛下は神の御使いのように、
わが魂胆を見抜いておしまいになります。
おや、ヨアブ様も陛下の御前にお出でになりました

（ヨアブ登場）

ダビデ　ヨアブよ、お前がこの女を私のもとにつかわし、

[160]

アブサロムを弁護するための讐え話を語らせたのだな？

ヨアブ　私ヨアブが、奏上するよう命じました。

女は語り、陛下はご得心なさいました。

ダビデ　得心した。だからやると言ったことは喜んでやる。

息子呼び寄せよ。私と一緒に暮らすことができるように。

ヨアブ　主を誉めたたえよ。王様万歳。

このヨアブめは陛下の慈悲深さを覚りましてでございます。

ご息子のアブサロム様をお許しになるというのですから。

若君はとても美しい青年でいらっしゃる。

全身どこをとっても、非のうちどころがありません。

[170]

輝く白いうなじにくるりとしだれ掛かる髪ときたら、

まるで陛下が奏でる豎琴の弦のよう。

イスラエル中を探してもこれほど立派な青年はおりませぬ。
陛下の祝福をお受けになれるよう、こちらにお連れいたします。

(ヨアブに連れられアブサロム登場)

ダビデ お前がハツォルの野で [アムノンを] 殺したのか？

ああ、アブサロム、わが息子！ わが息子、アブサロム！

だが、こんなふうにお前の心を悩ませて何になる？

生きてゲシュルから、そなたの家に帰るがよい。

ゲシュルからエルサレムに帰るがよい。

お前の魂を責め苛んで何になろう？

[180]

アムノンはもうこの世におらぬが、アブサロムは生きておるのだ。

アブサロム 父上、私はイスラエルに対して罪を犯しました。

父上と王家に対して罪を犯しました。

タマルを辱めたアムノンの罪のために、アブサロムは道を誤りましたが、

父上の胸に激しい復讐心はなく、

ヨアブのおかげでアブサロムはお赦しを得ることができました。

ダビデ 下がってくれ、イスラエルの者たちよ、

剣をとってラバ攻略に参加した者たちよ。

アンモン人の豊かな宝蔵をくまなく漁るがよい。

生きるのだ、アブサロム、息子よ、今一度、人生を平安に生きるのだ。

[190]

お前に平安あれ。エルサレムに平安あれ！

(アブサロムを残し、全員退場)

アブサロム ダビデ王は去り、アブサロムはひとり残って、

若き日のうららかな春の盛りに花開いている。

生き存えたアブサロムが、イスラエルの諸部族からも、

長老たちからも、主立った者たちからも尊重されぬはずがあるまい。

こめかみのぐるりに、

恭しく捧げられた花冠を戴いたり、

願いの筋がある者たちがこぞってアブサロムを訪ね、

正義を求めたって、よさそうなものだ。

かくなる上は、シオンの城門に腰をかけて、

[200]

大いなるエルサレムに正義の律法を布告しよう。
アブサロムが然るべく処遇しない者は、
誰一人この地におらぬようにしよう。
だから、おれは、できる限り、努めて
イスラエルの諸部族の人々を可愛がることにしよう。

[第8場]

(ダビデ、イッタイ、ザドク、アヒマアズ、ヨナタン他登場。
ダビデは裸足で、頭にはゆったりした被りもの。
全員嘆き悲しんでいる態)

ダビデ　高慢な欲望よ、我らの魂に逆らうもつとも血なまぐさい叛逆者よ、
お前の貪欲な喉ときたら、大地や大気や海や天が、
どれだけ蓄えを傾けても、満足させることはできない。
お前のせいで、これらの悩みが私の血を涸らし、
お前の凶眼の毒に貫かれて、わが汚れた骨肉は
力と精気を損なわれた。
ファラオとその呪われた軍勢を罰するために、
大いなる主の命令で海の水は引き、
海底の砂地が現れて、
主の下僕（しもべ）の足下に奉仕を捧げたとか。
ダビデの罪に災いを下すために
主は、ダビデの腸（はらわた）をその胸に背かせ、
その心臓を、死をもたらす手で包み込む。
ああ、アブサロム、天の怒りは、野心の炎熱で
お前の胸を焼き焦がし、
サタンはお前を欲望の塔に封じ、
お前の考えをイスラエルの高慢な人々に示し、
この国の無情な石の上に、進んでその身を投げ出させるのだ。
だから、私とともに泣け、イスラエルの息子たちよ。

[10]

(横たわる。その他全員これに倣う)

- ダビデとともに地に臥せるのだ。ダビデとともに、[20]
 我らの心を見そなわす神の御前（みまえ）に嘆け。
 涙の雨で悲しみの土地を潤し、
 花々の面（おもて）を一つ残らず露で満たせ。
 泣け、イスラエルよ。ダビデの魂は涙となって溶け出し、
 泣き濡れた目の泉からすっかり流れ出て、
 結局、魂そのものを感覚のない大地に注ぎ出してしまうのだから。
- ザドク 泣け、イスラエルよ、ダビデ王の魂のために嘆くのだ。
 髪の毛を掻き耨り衣服を引き裂いて大地に撒き散らせ。
 心からの悲しみの痛ましい証として。
- アヒマアズ ああ、我らの目が心臓と導管で結ばれていて、[30]
 そして我らの心臓を満たす血の海が、
 この聖なる山に幾筋もの流れとなって注ぎ出るならよいのに。
 ダビデ王の悲嘆のために我らも果てたいと願う証として。
- ヨナタン ならばこのオリーブ山はあたかも平地に見えるほどに
 大海の中に沈むだろう。その海は我らのため息で荒れ狂い、
 その立ち上る波の轟きの中で
 血を流す我らが心の痛みを天に報告してくれるだろう。
 ダビデ王の悲嘆のために我らも果てたいと願う証として。
- イッター 地上にあるものだけではダビデ王の苦悩のために十分に泣いてはくれない。
 だから、天にあるものたちよ、嘆いてくれ。雲はみな散ってくれ、[40]
 哀れみ深い星々に我らの苦痛が見えるように、
 そして輝く涙のしずくを大地に注いでくれるように。
 星たちがダビデ王の苦悩のために嘆いている証として。
- ザドク さあ、陛下の伏した御体を起こしてさしあげるのだ。
 信仰なき者がするように嘆くのを止めて頂こう。
 かつて陛下を玉座から見捨てることはないとお約束くださった
 ヤコブの神は正義の神、今なおその誓いは公正で二言なきもののはず。
- ダビデ ザドク、高潔な司祭よ、選ばれし王を護る
 聖なる力を備えた神の箱の番人よ、[50]
 私の神がその誓いにおいて何の陰りもないことは百も承知だ。
 この頭は何時ぞ平安のうちに墓に横たわることになろう。
 しかし私の息子が優しかった己の魂に背き、

父の幸福を脅かして兵を挙げ、
私のあらゆる希望をわが子に対する絶望に変えたのだ。
そしてその絶望が私の血管を隅々まで悲しみで蝕むのだ。

イッタイ　ダビデ王よ、その絶望は致命的な疫病みたいなもの、
悲しみはそれを長引かせはするが予防はしてくれません。
だから、どうぞその悲しみに伏した御眼をあげて我が軍をご覧下さい。
あなた様の立派なお人柄をお慕いして
王の御身の周りに集まっているのですから。
彼らの勇気と熱意あふれる敬愛の情に
晴れやかなお顔を向け、暖かい励ましの言葉をおかけなさいませ。

ダビデ　イッタイの言葉は我が耳を癒してくれるようだ。
イッタイ　イッタイの言葉があなた様の耳を不快にさせたりすることのありませんように。
イッタイの心は涙であなた様の胸に軟膏を塗って差し上げたいのですから。
ダビデ　しかし、あなたは何ゆえ我々と一緒に戦いに赴くのか。

あなたはここイスラエルでは外国人、
ガテの強大な王、アキシの息子ではないか。⁽³³⁾
だから戻って、あなたの父と共にいなさい。
あなたは昨日来たばかりなのに、どうして今
私たちの苦境をあなたに分け与える必要があるのか。
あなた自身とあなたの兵を安全に守りなさい。
わが軍に降りかかる危険は私が甘受しよう。
どうか神があなたが示した友情に報いてくれるように。

イッタイ　イスラエルの神がダビデ王に命を授けたのが確かであるように、
王がどこにおわしまししょうとも、どのような危険な目にお遭いなさろうとも
イッタイは生きるも死ぬもそれにお供するのです。

ダビデ　では、優しいイッタイよ、いつまでも私と共にいるがいい。
王にとっては喜びに、イスラエルにとっては恩恵になるだろう。
さて、ザドクよ、お前は神の箱を持って
聖なるエルサレムに戻りなさい。
もし私が主の恵み深い御眼に寵愛を見出したならば、
主は私が死の門をたたき前にもう一度
その御手を私の心の上に置いてくださるだろう。
そして我が心に力を、我が目にも力を授け、
安らぎを味わい美しい神の箱と聖なる大天幕の姿を

見るようにしてくださるだろう。

しかし、もし主が「これまでの寵愛はもう失せた、
ダビデにもはや喜びは見出さない」と仰せになるなら、
私は謙虚な心だけを身にまとしてここに横たわり、
主の怒りが課す苦痛を真摯に受け止め、
主が私を殺すのにお使いになる剣に口づけをしよう。
だからザドクよ、お前の息子アヒマアズと
アビヤタルの息子であるヨナタンを連れて行きなさい。
彼らがあなたからの何らかの知らせを届けに戻るまで
私はしばらくこの荒野にとどまることにしよう。

[90]

ザドク あなた様の僕は喜んで王の言いつけに従います。
良い知らせで王の心を元気付けてさしあげたいと願いながら。

(ザドク、アヒマアズ、ヨナタン退場)

イツタイ さて、今なら王に申しあげても差し支えないでしょうから
あなた様の御為を思ってご報告させて下さい。
あの非情で無礼者のアブサロムと共に、
あなた様の昔からの顧問官であったアヒトペルが
あの堂々たる反乱軍を指揮しております。

[100]

ダビデ では、危険を冒してまで我が王冠を狙っておるのだな。
ああ神よ、あの者の滾る血の境界を
この地球に海の水をまとわせる月の軌道内に
収めることのできる神よ、
アヒトペルの助言に限界を設けてください。
私の魂の苦しみには限りがなくとも
彼の計略を愚かなものにして下さい。

[110]

(ホシャイ登場。裂けた上着を着て、頭には被りもの)

ホシャイ 我が主君である王に幸と栄誉あれ！

ダビデ どのような幸や栄誉があらうか、
私のような窮地に苦しむ者にとって。

ホシャイ ああ、慈悲深い王よ、そんなに嘆くのはお止め下さい、

下僕（しもべ）であるこのホシャイの死を願っているのであれば。
 ホシャイの命はあなた様の安寧にかかっているのです。
 ですから、ため息をつきつつあなた様のお傍にすることで
 我が主君の御心の片隅を慰めて差し上げたいのです。

ダビデ　　いや、ホシャイ、それはならん。お前が私の傍にいても [120]

重荷になるだけだ。私はお前のことを心から大事に思い
 ダビデのためについてくれるそのため息に我慢できないからだ。
 しかしもしお前が美しきエルサレムに戻り、
 アブサロムにこうしてくれるならば、即ち
 これまであれの父親の王座に対して忠実な部下であったのと同様
 これからあれにも忠実に仕えと、そしてお前があれのことを王と呼ぶならば、
 アヒトペルの助言は無と帰すかもしれぬ。
 そしてザドクとアピヤタルがエルサレムにいるから
 お前たち三人で私の息子の秘密を探り出し、
 同様にエルサレムにいるアヒマアズと [130]
 忠実なヨナタンを通じて伝言を送らせなさい。

[ホシャイ]　　ではどうか立ち上がり、天に成功をお祈りください。

ダビデ　　ホシャイ、そうするぞ。もっとも我が息子アブサロムに
 対して武器をとるこの手足は引きずるように重たいが。

(退場)

[第9場]

(カーテンが開くと、アブサロム、アマサ、アヒトペル、またダビデの側室
 たち、およびその他が現れる。彼らはみな威儀を正し、アブサロムは王冠
 を戴いている。)

アブサロム　　さて、お前たち、私の父の側室であった者どもは、
 父の汚れた情欲的な火に注がれる酒精であったが、
 お前たちは、父の名誉が彼の家で損なわれるのを見てきた。
 この家は、いま全世界が見てのとおり、私の所有となったのだ。
 私がお前たちを来させたのは、私の名声の引き立て役とするため、
 また、お前たちの王の栄光を陰らせるためだ。

その生は彼の名誉とともに、いまや
 黒い雲の内部に固く取り囲まれているが、
 崩壊すれば、雲と、雲を造り上げている彼の生の内実と
 膨れ上がる傲慢さは、大雨となって激しく降り落ちるであろう。 [10]
 その時には、天の星たちが、豊かな星相をもって大地を照らし、
 天はアブサロムへの愛をもって燃えることだろう、
 我が美しさは、全ての霧を追い払うのに十分で、
 太陽の天球を三重の火で包むことであろう、
 その澄んだ目が曇ったり、
 険悪な日によって損なわれてしまう前に。

側室1 恩知らずのアブサロムよ、あなたの凶暴な武力によって
 打ちのめされた、あなたの父上の名誉と、私たちの名誉は、
 天の全軍に向かって復讐を叫び求めるでしょう、 [20]
 その兵力は常に、傲慢な者たちに対して武装されており、
 野心的なあなたの頭上に、災厄の矢を放つことでしょう、
 ダビデ王の座にこのような不名誉を加えたが故に。

側室2 ダビデ王の座に、ダビデ王の聖なる座に不名誉を加えた故に。
 天使たちは、ダビデ王の笏杖を、火の剣をもって守り、
 征服者たる王の握り拳の上に、鷲のように坐して、
 いつでも敵に襲いかかろうと構えている。
 だから、王に敵する者たちの隊長であるあなたは、
 あのアザヘルよりも素早いからといって、⁽³⁴⁾
 つまり敏速な脚力の鹿を追い越すことができたアザヘルよりも素早いからといって
 鷲たちの強力な怒りのくちばしや、 [30]
 彼らの威厳ある翼の、恐ろしい飛翔を逃れることができるなどと思わないことです。

アヒトペル わが主イスラエル王は、
 愚かな女の脅しにご立腹なさいませぬように。
 ダビデがこれまで享受してきた喜びとともに、
 彼女たちを再び自分たちの閨房へ追い返しなさい、
 やがてダビデ王が征服されれば、彼女たちもおしまいですから。

アブサロム お前たちの私室へ行け、軽蔑すべき娘たちよ。
 抑制を知らぬ肉欲の激情に捉えられたものたちよ、
 そしてお前たちが流す涙をもって、お前たちの寝椅子を洗うがよい、
 ダビデの王国が崩壊した悲しみの故に。 [40]

側室1 いいえ、アブサロム、ダビデ王の王国は、
偉大なヤコブの神の指に、しっかりと鎖で繋がれており、
反逆者への愛で、それを緩めるなどということはありません。

〔側室たち〕退場

アマサ もし私が、王に忠告申し上げるとすれば、
この側室たちには、血をもってその嘲弄の償いをさせるべきです。

アブサロム いや、アマサ、お前の武勇の剣をもって

戦場からダビデの軍勢を追い払い、

そして、この愚かな女どもを我々の手から逃れさせ、

彼女たちが経験してきた恥辱の償いをしてやれ。

まず、アブサロムは、ラッパを吹き鳴らして、

[50]

ヘブロン全土に、イスラエルの王であることが宣言された、⁽³⁵⁾

そして今や、美しいエルサレムにおいて

完璧なる威厳と王冠の栄光とをもって王座についている。

五十人の美しい従僕が、私の壮麗な戦車につき従い走り、⁽³⁶⁾

散り散りになって口々に私の名声を空に響かせ、

私が乗って行く先々で敬意を表す。

神の最終的な目的を、その顔に

表しているアブサロム、

それは、イスラエルにおいて彼にめぐみを与えるという目的であるが、

そのアブサロムが、どうしてその全力を尽くして

[60]

神の喜びを最も満足させる状態を達成するために努力し、

神の掟と神の契約とを、潔いものとして守り続けなくてよからうか？

神の雷（いかずち）は、私の髪のに絡み付いており、

そして神の雷光は、私の美しさによって光を消す。

私は、神が、栄光を示すためにお造りになった人間なのだ、

私の父が、罪の過ちを犯したために

かつて我らの選ばれた先祖たちが祝福を受けた

土地へ至る道を見失ったとしても。

（ホシャイ登場）

ホシャイ イスラエルの美しい王万歳！

今や、王のもとに何千人もの者たちが押しかけております。 [70]

アブサロム ホシャイが、自分の敵にそのような挨拶をするのはどういうことだ？

それが、ダビデ王の魂にお前が示した愛なのか、

その王への援助を、お前は命を懸けて誓ったはずではないか？

なぜお前は、王の窮境に際して、王から離れるのだ？

ホシャイ それは、主なる神とイスラエルが、あなた様を選ばれたからです。

それゆえ、以前はあなた様のお父上に

その眼によしとされる忠告によってお仕えしましたが、

そのように今、私はお父上のご子息に従います。

アブサロム ではホシャイよ、アブサロム王はお前を歓迎するぞ。――

ところで、私の指揮官たち、また私を愛してくれる顧問官たちよ、 [80]

私は、我らの武器を用いる時が来たように思う、

見捨てられた父ダビデと、その軍勢とに対して。

まず忠告してくれ、私の信頼するアヒトペルよ、

この高邁な偉業を首尾よく遂行するために

いかなる時期に、いかなる手順を用いることが最善であるか。

アヒトペル 私に一万二千人の勇敢な兵士を選ばせてください、

そうすれば、夜の闇がその漆黒の霧の中に

老練な兵士たちが用いる秘密の戦術を隠している間に、

私は、お怒りの父上を攻撃いたしましょう。

そうすれば、人々は突然の襲撃から逃れようと必死になって努力し、 [90]

彼らの武器を持つ腕も弱りきって

隊列を乱した巨大な烏合の衆となって

命からがら逃げ出し、王を見捨てていくでしょう、

その時を捉えて、私は王に最後の一撃を食らわせ、

平和のうちに人々をあなたの足元に導いて参ります。

アブサロム アヒトペルは、よい忠告を与えてくれた。

しかし、ホシャイが我らにいかなる意見を述べてくれるか聞くことにしよう、

彼の豊かな経験は、十分聴くに値する。

ホシャイ アヒトペルは聡明なるお方、これまでの彼の助言のどれをとっても、

わが主君たる王が耳を傾けるにふさわしい見事なもので、 [100]

私ごとき者が出る幕などございませんでした。

しかしながら、アブサロム王もアヒトペルもご気分を害さずいただきたいのですが、

ただいまお聞きしたものに限りましては、良き助言でも従う価値のある助言でもありません。このように申しますのも、よくご存じのとおり、お父上の兵たちは強く、しかも子らを奪い取られた母熊のように苛立っているからでございます。

さらには、剛勇の士たる王自身、

武芸も戦術も鍛え抜かれたお方であり、

万が一の最悪の事態に備えて、

下級兵士たちとともに野営しようとはなさいません。

私の知るところでは、今やその慣れ親しんだ戦法に教えられて、 [110]

どこか人目につかない洞穴に潜み、

いずれ劣らぬ屈強の兵士たちがかっちりと警護させているはずです。

戦の最前線が怯んだなら、

それだけで彼らはアブサロムの逃亡を発表するでしょう。

それによってあなたの兵士たちの勇気を挫くのです。

さすればこの時とばかりにダビデが、

歩みを阻まれた獅子のように怒りに燃え立って、

自ら戦いに躍り出るや、兵士たちもみな一丸となって戦い、

少数の者にダビデを恐怖で打ち負かすことなどさせはしないでしょう。

したがって、私の助言はこうでございます。ラッパを吹き鳴らし、 [120]

ダンからベールシェバにいたるまで全男子を召集なさるのです。⁽³⁷⁾

彼らは海辺の砂さながらの大軍を成して

たがいに踵を接して進軍するでしょう。

このようにしてわれらが力を結集してダビデを襲えば、

露のしずくも天から降り注ぐ驟雨を浴びて落ちるがごとく、

彼には行軍の供は一人として残りません。

さらには、たとえ彼を援護する都市があったとしても、

多数を誇るわれらの兵士たちがわれらに縄をもたらし、

われらはその都市を川の流に引きずり下ろして、

われらを撥ね退ける一つの石も残らないようにするのです。 [130]

アブサロム　今のホシャイの助言を貴殿はどう思われる？

アマサ　私にはホシャイの助言の方がアヒトペルのものよりも

はるかに良いように思われます。

また、ここにおります兵士たち全員も同意見であろうと考えます。

全員　ホシャイの助言はアヒトペルのものよりすぐれています。

アブサロム　ではわれらは全員ホシャイの助言に従って進軍するものとする。

イスラエルの領地の隅々までラツパの音を響かせ、
 全男子を召集し、王に仕えさせるのだ。
 アブサロムの熱望する魂を満たしてくれる唯一つの喜びである、
 父の王冠を手に入れられるように。

[140]

([アヒトペルとホシャイ以外は全員] 退場)

アヒトペル [傍白] あなたの企てに従う者に災いが降りかかることだろう。
 アヒトペルの助言を蔑ろにするからには。

(ホシャイを残して [退場])

ホシャイ かくして不信心を許さぬヤコブの神のお力により
 その下僕たるダビデの目論見は私によって達成され、
 アヒトペルの助言は捨てられることと相成った。

(ザドク、アビヤタル、アヒマアズ、ヨナタンが登場)

ザドク ホシャイ殿に神のお救いがありますように！そしてダビデが息子に勝利しますよう、
 神がその熱意を傾けてくださいますように！

アビヤタル アブサロムからどんな秘密を収集できたか？

ホシャイ 神の箱を担う神聖なる祭司のみなさま、お聞きください。

アヒトペルはアブサロムにこう助言しました。

[150]

アヒトペルに一万二千人の戦士を選ばせてくれるようにと。

夜になったら、ダビデが激しい戦闘に疲れ果てている時を狙って、
 ダビデに奇襲をかけようとの腹積もりでした。

しかし私はもっと大きな軍勢を結集させるように助言したのです。

ダンからバールシェバにいたるまでの全土から兵を召集し、

戦場で彼を襲って力を見せつけなさいませ、と。

したがって、アヒマアズとヨナタンを使わして、

この機密情報を王に知らせなさい。

今夜は野営地にとどまらず、

すぐにもヨルダン川をお渡りいただくようお勧めするのです。

[160]

王とその民のすべてが殺戮の剣に屈しないために。

ザドク　では行くがよい、アヒマアズ、ヨナタン。

すぐにこのことを王にお伝えするのだ。

アヒマアズ　そうします、父上。アブサロム直属の間者が

この策を阻み、われわれ二人をここに留めおかぬ限りは。

(全員退場)

[第10場]

(シメイが一人で [登場])⁽³⁸⁾

シメイ　イスラエルのあの男は王としてずっと国を支配してきた。

いや、むしろ暴君といってもよいほどだ。

玉座を枕として憎々しいその頭を載せ、ふんぞり返っておった。

神が彼にその玉座をお恵みになったのも分不相応というものだ。

その彼が頭をどん底の地獄に置くことになるのもうじきだろう。

彼の椅子に忌み嫌われてその座から退位することになるのだ。

ああ、生まれつき私の胸が毒を海のごとく持っていたならば！

そうすれば彼の忌々しい頭の上にその毒を注いでやれたのに。

聖油によって栄誉を与えられ、

イスラエルの王として崇められてきたその頭に。

[10]

あるいは、私の息が地獄の煙でできていればよかった！

それは地獄で永遠の罰を受けるやつらの溜め息に汚され、

あるいはマムシやヒキガエルや有毒な草の根をえさとする

あの蛇の喉から吐き出される呼気に毒されている煙だ。

そうすれば、あの羊飼いの暴虐を罵るために

私が報復の唇を開くと、

私の言葉は悪臭を放つ毒を吐き、

毛穴から入った毒が彼の膨れ上がってうずき痛む身体を引き裂くことだろう。

ユーピテルの頑強な闘士たちが雷火を携えて戦ったとき、

雲を引き裂いた戦闘の風のように。

[20]

ほら、わが魂の忌み嫌うあの男がやってくる！

私のポケットには彼に投げつけようと用意した

石が一杯に詰め込んである。土や埃もろともこの石を、

はちきれんばかりの侮蔑を込めて、彼にお見舞いしてやろう。

(ダビデ、ヨアブ、アビシャイ、イッタイ、その他の者たち [登場])

来るがよい、この人殺しの悪人め。

主はサウルとその子孫たちすべての罪なき血を

お前の呪わしい頭に注いだ。

彼らの高貴なる玉座は卑しいお前に篡奪されたのだ。

そしてお前の魂深くその報復をするために、

主は王国をお前の息子に与えたのだ。

[30]

主はサウルの受けた不当な裏切り行為の恨みを晴らしてくださるだろう。

お前の罪がいまだに天を悩ませ続けているのだから、

お前の殺人と姦淫の罪は

イスラエルの衆目に晒されて

流血と死と地獄の罰を受けることとなる。その罰を受けるだけのことをしたのだ。

立ち去れ、人殺し、立ち去れ!

(シメイはダビデに石を投げる)

アビシャイ この死んだ犬は何ゆえわが主君である王を罵るのか?

お止め下さいますな、あの男の首をはねてやります。

ダビデ ツェルヤの息子よ、我らが神の御わざを

邪魔しないでくれ。

[40]

シメイが私をこのようにとがめだてするのは、

彼をして、主がダビデの罪を

非難なさっているからなのだ。このダビデが

顔を赤らめているのは、良心の呵責で恥じ入っているゆえなのだ。

シメイが私に悪態をつくのも当然のことだ。

シメイ 貴様が罪深く、貴様が生きることが

世間にとって忌わしいことだと貴様の良心が教えるのであれば、

取り巻きどもに貴様のもとを離れるよう命じるがよい。

そして、俺が貴様の恥を誇れるよう、

ここで自ら命を絶つがよい。

[50]

ダビデ シメイよ、私はそなたのように自暴自棄になっておらず、

我が神の契約に信頼を置いている。

それは慈悲を土台とし、改悛で造られ、

我が魂の栄光で仕上げられるものなのだ。

シメイ 人殺しめ。最期に及んでまだ慈悲を望むか！

貴様の額には嫌悪と破壊が鎮座し、

呪われた魂が身体から離れゆくさまを見守っているのだぞ。

最後のあえぎとともに、貴様の魂をつかんで引き裂き、

その一片一片を、地獄の至る所に悉く投げつけようとして。

失せろ、人殺しめ！ イスラエルの恥め！

[60]

邪な好色漢め！ 酔っばらいめ！ 天と地の疫病神め！

(ダビデめがけて石を投げつける)

ヨアブ 何？ かような苦境の極みにあっても、

政治の掟を曲げてまで

臣民の努めを蔑ろにする口実を与えることが、

ダビデ様は敬神と思われるのですか？

悲しみと共にあの犬を墓場へ連れて行け。

ダビデ ツェルヤの息子たちよ、奴の気持ちをとがめたり

しないでくれ。主がそのように仕向けていらっしゃるのだから。

見よ、私の身から出た息子が

彼同様怒り狂って我が命を奪おうと狙っている。

[70]

ベニヤミンの息子であれば、これ以上のことをしようぞ。

なにしろ、主の命ずることしかしないのだから。

主が今日の私の苦しみをご覧になり、

彼の呪いに代えて、この苦しみに耐えるダビデの心を

祝福してくださるかもしれない。

シメイ どうして貴様はそのように耐えて俺を怒らせるのか？

嗚呼、イシュ・ボシェトとアブネルの魂よ！

貴様が墓へと続く血の海を泳がせた二人、

次から次に血が吹き出す傷口が復讐を求めている

その二人の魂がここに在って、俺の燃えさかる復讐を果たしてくれたなら！

[80]

だが、俺は貴様の行く先につきまといながら、呪い続けてやる。

失せろ、怪物め！ 人殺しめ！ 軽蔑そのものめ！

(再び、塵を浴びせかける)

(アヒマアズとヨナタン登場)

アヒマアズ　ダビデには長命を、その敵には死を！

ダビデ　よく来た、アヒマアズ。それに、ヨナタンも。

そなたの主君であるこの王に、ホシャイからどんな知らせだ？

アヒマアズ　ホシャイ様は、我が主君である王に

直ちにヨルダン川を渡っていただきたい、

王様と家臣が皆殺しにされることのないように、とのことです。

と申しますのも、賢者アヒトペルがアブサロムに、

「王の軍は疲れて力を失っている。

[90]

そこで今夜、王が野営しているところを急襲なされよ」と助言したのです。

しかし主はアヒトペルの忠告を退けられ、

ホシャイ様の提案の方が賞讃されて採択されました。

その案は、全イスラエルを集結させ、

兵力にもものを言わせてあなたを攻撃しよう、というものでした。

ヨナタン　父アビヤタルは其上、王にお願いがあるとのこと。

ご子息に対しては兵士を差し向けられたし、

王自ら出陣してその身を危険にさらすことのないように、と。

ダビデ　アビヤタルにもお前たち二人にも感謝する。

それに、ホシャイにも感謝だ、主の報いがあらんことを。

[100]

だが、主の柔らかな手には最大の感謝を。

その御手が心地よく触れ、我が心は踊り出さずにはいられない。

熱狂する我が胸の内で讚美歌を奏でよう。

主は下僕である私の嘆願をお聞きになられて、

アヒトペルの助言を覆されたのだ。

今夜一人残らず川を渡ろう。

そして、朝には鬨の声を挙げようではないか。

惨く、情け容赦ない戦の声を。

ヨアブ　では、あなたの軍をどのように分けるべきか、

また、誰が隊長として指揮にあたるべきか我々に教えて下さい。

[110]

ダビデ　ヨアブ、そなたは我が勇敢な部下たちからなる三部隊のうち

第一部隊指揮の任にあたってくれ。

第二部隊は勇敢なアビシャイが指揮を。

第三部隊は公明なるイッタイ。このダビデが悲しんでいた時に
慰めとなってくれたイッタイのことは大いに称えるぞ。

そして、私自身はその真ん中をついて行こう。

イッタイ　ダビデ王よ、出陣なさってはいけません。我々一万人が逃げ出したとしても、
ダビデの敵にとってみれば、あなたお一人の半分の価値もないのですから。

あなたを愛する民たちはあなたの出陣を拒んでいます。 [120]

ダビデ　では、ダビデは、民にとって最善と思えることをしよう。

だが今こそ、我が諸候、隊長たちよ、耳を傾けてくれ。

我が声が哀れみ深い天を無駄につんざくことはなかった。

だから、お前たちの耳を素通りさせることのないように。

私のために、あの若者アブサロムの命を助けてくれ。

ヨアブ、そなたはかつて親密な言葉を用いて、

彼に対して怒りに燃える私の心に彼と和解するよう働きかけた。

それで、もしそなたの親族に対する愛が確かなものであり、

また、そなたが完璧なイスラエル人であることを証ししようとするならば、

行為でもって彼の味方と示してくれ。髪の毛一本触れずにいてくれ。 [130]

あの金髪は、気紛れな風が喜んで戯れ、

巻き毛を作りたがる。

そこに小夜鳴き鳥たちが巣を作り、

金色の房の悉くに美妙なあずまやをこしらえては

夜毎に歌って彼らの恋人を眠らせることだろう。

嗚呼、ヨアブよ、ジョーブ神の美しい装飾を損なわないでくれ。

ダビデの心を慰めるため彼が遣わした贈り物を。

我が諸候よ、あなた方がお分かりのように、最良のものはすぐ罪に染まる。

罪を犯した我らの足は、雌鹿の乳で洗われ、

燃えさかる石炭で再び乾かされるのだ。 [140]

嗚呼、神よ、あなたは尊大な罪を犯した哀れな奴隷をご覧になっておられる。

彼の縛り綱を引っばって、墓に落とそうとなさっておられる！

そういうわけで、私のために、愛しいアブサロムの命を助けてくれ。

イッタイ　我が王よ、我々はあなたのために、彼を手荒に扱ったりはいたしません。

([全員退場])

[第11場]

(一本の縄を携えてアヒトペル [一人きりで登場])

アヒトペル 私ことアヒトペルは屋敷もすっかり整理し、
 我が家での楽しみのすべてに別れを告げてきた。
 この縄にこそアヒトペルの喜びはかかっている。
 この輪の中に我が生を閉じこめるしかないのだ。
 アヒトペルが助言すれば、神の託宣を授かったも同様、
 それに従えば、めでたい成功は確実だった。
 そんな賢いアヒトペルが、
 今やイスラエル随一の阿呆扱いされている。
 だから、怒れる魂を羽ばたかせて、
 死の影の中に飛び去らせよう。 [10]
 わが死を悼んで天も永久に嘆き悲しみ、
 私が後にしてきた大地に大洪水を引き起こし、
 イスラエルの民と彼らのうるわしい実りに荒廃をもたらすがよい。
 この不名誉ゆえに私が吐(つ)いた溜め息のすべてが、
 わが生け垣に、死んだ主人を悼む喪服のように、
 いつまでも消えない霞のように立ちこめるがよい。
 大地よ、裂けてそなたの哀れな息子を
 呪われた胎(はら)に呑みこんでくれ。
 かつては食傷して吐き出した息子だが、
 今度は、がつがつと貪り食らい尽くしてほしい。 [20]
 その肉体をそなたの血脈を流れる毒に変えてくれ。
 天の道具だが地獄のように残酷なお前よ、
 天帝の義(ただ)しき判決どおりに私を捕まえ、
 イスラエルを呪うこの胸の鼓動を止めてしまいがよい。

(退場)

(アブサロム、アマサ、アブサロムの家臣一行とともに [登場])

アブサロム　今こそ、イスラエルの王冠と玉座の行方が、
わが剣の威力によって定まり、
この刃にダビデの血で書き記されるべき時だ。
ユーピテルよ、黄金の天空を解き放ち、
汝の燃える眼で見つめよ、
その眼に誉れの光を与えるべく造りし者を。 [30]
汝の御手の卓越を愛していることを示すために、
星の花環をわが頭上に下したまえ。
星々の感応力のおかげで、イスラエルを
歴代の王をも凌ぐ威厳によって統べることができるように。
指揮官たちに告ぐ。そなたたちの君主の顔が
太陽にもまさる輝かしい名誉で光り輝くよう、奮闘せよ。
わが美しい光線の威力で
このうるわしい原野が畑のように実りをもたらすように。
大地が甘い乳と蜜の流れであふれるように。
そよそよと吹く心地よい風に乗って、神は [40]
桑の木の梢を歩み、⁽³⁹⁾
かつてモーセの民にしてくださったように、
どんな悲しみに焼け焦げた胸でも冷ましてくださる。
昼間は、主は雲のなかに姿を隠して、
そなたたちの歩みを喜びの野に導いてくださる。
夜には、燃えるように輝く柱が、第二の太陽のように、
そなたたちを先導する。
そこには主の神聖さの精髓が宿っているのだ。
だから昼も夜もそなたたちは平安へと導かれるのであり、
魂を無欠の幸福へと導く喜びの道から [50]
外れることは決してないのだ。
私が王になった暁には、主は喜んでこのように計らってくださいなのだ。
だから奮闘せよ。指揮官たちよ。このような喜びがそなたたちの胸に、
うるわしい勝利とともに訪れるように。

(〔退場〕)

(戦闘。アブサロムが髪の毛で宙づりになっている)

アブサロム　　どんな怒れる天使が、この暗き森に潜んで、
 残虐な手をわが髪の毛に置き、
 この肉体を天と地の間に宙づりにしたのだろう。
 アブサロムには付き従う兵士の一人もなく、
 この不愉快に絡みついた巻き毛を解いてもらうことも
 髪の毛の持ち主を痛めつけているこの木を切ってもらうこともできないのか。
 神よ、御手の栄光をご照覧あれ。
 自然の業（わざ）が産み出した選りすぐりの果実が、
 腐った枝のようにこの木に垂れ下がり、
 斧で切り落とし、すぐ火にくべるしかない体たらくになっているのを。 [10]
 あなたは、死の約定からわが肉体を解き放つ
 尋常な助けを悉くくださろうとしません。
 ああ、わが美しさによって、この感覚を持たない植物に
 感覚と力が与えられ、私がこの苦境から解放されるようお計らいください。
 また、あなたがその生を稀なる奇跡そのものになさった者が
 死んでしまわぬよう、何か驚くべき御業をお示してください。

(ヨアブが兵士1名を伴って [登場])

兵士　　殿、アブサロム殿下が鬱蒼とした樫の大木に
 髪の毛が絡まって宙づりになり、
 自分で外して逃れることができなくなっているのを見ました。
 ヨアブ　　なぜお前はアブサロムを殺さぬのか。 [20]
 父と天に背いた極悪人だぞ。
 そうしていたら、その働きに対して、
 銀貨十枚と黄金の帯を与えただろうに。
 兵士　　たとえ銀貨千枚と引き換えでも私は
 ダビデの息子をこの手に掛けたいと思いません。父君が
 殿にもアビシャイ様、イツタイ様にも
 手荒なまねはするなど釘をお刺しになったお方ですから。
 その命令は私たち全員が聞こえるところで行われました。

ですから、仮に私が殿下を殺したとしたら、

殿は自分が王の不興をこうむる前に、

[30]

御みずから私を下手人として非難なされたことでしょう。

ヨアブ　しばしそなたとおふざけを楽しまねばならぬ。

アブサロム　助けてくれ、ヨアブ、このアブサロムを助けてくれ。

そなたの怒りを血に浸さないでほしい。

かつてはそなたを養い育て、

友情で心をなごやかに和らげたこともあった者の血に。

頼む。もう一度、父に会わせてくれ。

わが最愛の父にしてそなたの主君に。

父の目の前で血の涙を流すことで、

私の最後の服従が真っ当で後悔の念に満ちたものであることを

[40]

大地が証言し、天が記録できるように。

ヨアブ　自然に背き、天にも地にも憎まれる者よ。

おのれの父であり私にとっては主君である方の命を狙う者の

命を私が助けると思うか？

見よ、主は一本の木に

お前の頑な心臓の安泰と栄誉を絡めとり、

感覚を持たない植物によって、その高慢を抑えさせたのだ。

アブサロムよ、そなたは自分の男前は主の誇りだと思い上がり、

頼みにしておったが、その男前を

主はどのようにご照覧になっているだろう？

[50]

恐ろしい死を目前にしてもまだわからないか。

徳高き魂が頑な高慢さで一杯になってしまうと、

いくら上辺の飾りや見目麗しさを表面を取り繕っても、

主は愛したまわぬことを。

イスラエルを穢し、

その大地を子供たちの血で染めたお前の罪に

復讐すべき時に、こうしてお前に道を説いておれようか。

いかなる劫罰でも足りない

お前に相応しい罰がこれだと観念するがよい。

([アブサロムを刺す])

アブサロム　ああ、ヨアブ、ヨアブ、冷酷無情なヨアブ！

[60]

こうしてお前は主である王の心を突き刺したのだ。
 王の神々しい気質は、自らの子が血を流すのを遺憾に思い、
 このアブサロムのためにたいそう気に病むに違いない。
 ああ、親愛なる父上、あなたの涙にぬれた目で
 この茂みを貫き、必滅の一撃で突き刺された
 あなたの息子、あなたの最愛の息子の姿を
 見通してくればいいのだが。
 しかしヨアブよ、どうか私を哀れみ、父を哀れんでくれ、ヨアブ。
 父王の魂の苦悶に哀れみを。私の生（生き様）を嘆くその魂も
 私の死を聞けば事切れてしまうだろう。

ヨアブ　もしダビデ王がお前の現状にそのように同情するなら
 どうして私に剣を与えお前の元に遣わしたのか。 [70]
 ヨアブがお前にしてやれることと云ったら
 苦しみから手早くお前を解放してやることだけだ。
 さあ、アブサロム、ヨアブの哀れみはこれにある。
 そしてこれこそが、傲慢なアブサロム、ヨアブの愛なのだ。

（[もう一度アブサロムを刺す] ヨアブ退場）

アブサロム　そのような愛と哀れみをイスラエルの神が
 お前に与えるのであれば、
 ダビデ王への神の愛のために私を哀れんでくれ。
 ああ、親愛なる父上、あなたの腸（はらわた）が血を流しているのが見えますか。
 ご覧下さい、死があなたの最愛の息子アブサロムに襲いかかったのです。
 ご覧下さい、そして哀れみ、許し、アブサロムのためにお祈りください。[80]

（5, 6人の兵士登場）

兵士1　ほらあそこに、謀反人が運命の絶頂と見えるやああして宙吊りになっている。
 お前の美しさの効力はどこへ行った、アブサロム？
 今や、我々の中にお前の顔を恐れ敬う者がいようか？
 あるいは、父親に対する謀反と
 父親の息を止めんがために準備された縄を包み隠し
 お前の金髪に恋したりする者がいようか

ヨアブ隊長が先鞭をつけてくれた
この一撃でお前の命とお前の罪を終わらせてやる。

([アブサロムを刺し、アブサロムは死亡])

さあ、この美しい反逆者を引き下ろしてやろう。
そしてこの薄暗い森の中のどこかの溝にでも
彼の巨体を埋め、その上に石を積み上げよう。 [90]
彼の石のような心が父親の死を求めたのだから。

(勝利の太鼓と旗と共に、ヨアブ、アビシャイ、兵士たちが再び登場)

ヨアブ よくやった、勇敢なる兵士たちよ！反逆者を引き下ろせ。
この泥まみれの溝に彼の遺体を埋葬し、
忌まわしい思いに満ちたその胸を山ほどの石で覆うのだ。
この暗いエフライムの森の鬱蒼とした茂みが
彼の呪われた墓の上に永遠に垂れ込めるだろう。
不吉な烏と梟が彼の甲いの鐘を鳴り響かせ、
彼の呪われた魂を大声で非難しつつそこにとまるだろう。
烏と梟は、そこに餌食とした生き物たちの腐肉を積み上げ、 [100]
やがて彼の墓は悪臭放つ骨で埋め尽くされ、
あらゆる人に忌み嫌われるものとなるだろう。
こうして彼の最期が彼の名におぞましさを、
彼の反逆行為に永遠の恥を生みつけるようにするのだ

(全員退場)

[第2のコーラス]

コーラス登場

コーラス ああ、畏れるべきは神の正当な裁き、
神の気高い心は人間の移ろいやすい美や
輝かしい姿かたちへの哀れみで動じることは決してないが、

たとえその人の姿かたちが醜かろうと
 内なる心に謙虚さと熱意があれば
 その真っ当な魂という美德によって動かされるのだ
 さて、ダビデ王の生涯の残り三分の一の物語と
 それに加えて王の誉れ高き崩御のご様子、
 また、今わの際にダビデが裁きを下した者たち全員の死を
 物語るための話の蓄えはまだ尽きませんので、
 我らはここで話を終え、次は皆様を喜ばせる話を
 三倍もの喜びでもってお伝えしましょう。

[10]

(退場)

[第13場]

(トランペットが鳴り響き、ヨアブとアヒマアズ、ホシャイが
 アマサとその他のアブサロムの従者たちと共に登場)

ヨアブ イスラエルの兵士たちよ、ユダの子孫たちよ、
 このよううんざりする争いに身を投じ
 自らの剣でイスラエルの腸(はらわた)を引き裂いた者達よ、
 そなた達屈強な軍隊の不敬な將軍は
 イスラエルの救い主によって墓へと連れて行かれた
 恥とあらゆる部族からの嘲りに満ちた墓へ。
 そこでだ、そなた達の名誉を塵あくたの中から救い
 そなた達の血液が骨肉の傍で健全であるようにするために、
 ヨアブの軍旗を掲げてその雄々しい首を守らせてくれ。
 そなた達の目と、武器と、心を、
 ダビデ王の命を敵から守ることに向けるのだ。
 過ちがお前たちのあまりにでしゃばる心を被い
 お前たちは選ばれし王座と王の命に対して罪を犯した。
 王のおかげでお前たちの命も祝福されているというに。
 篡奪者について戦場まで行ったものの
 そいつの正当な死により、今やお前たちの命が脅かされているのだ。
 しかしヨアブはそなた達の惑わされた魂を哀れみ、

[10]

イスラエルの安寧とダビデ王と天に対して
 快く和解する者たち全員に
 赦しと平和と愛を申し出るぞ。

[20]

アマサ、お前がアブサロムの指揮の下で
 反逆の烽火を上げた軍の統率者であった。
 それゆえ、自分の兵士たちの命を気遣い愛する
 賢明で分別ある隊長として、
 彼らをこの名誉ある同盟へと促すのだ。

アマサ　　そうします。少なくとも最善を尽くします。

また、あなた様が申し出てくださった恩赦に対して
 この首を救って下さったことと同様、感謝の念を捧げます。—
 さあ、お前たちイスラエルの惑わされし哀れな民たちよ、
 自らが負った過ちがわかったからには
 感謝の念と正当な服従を誓って静まるのだ。
 見ての通り、お前たちの隊長が先鞭をつけよう。
 こうして我々の剣をヨアブの足元に投げ捨て、
 心からの熱意と敬虔さを持って、我々の財産も体も
 ヨアブ殿の慈悲深い手にゆだねるのだ。

[30]

(〔他の者たちとともに跪く〕)

ヨアブ　　立って、そなた達の剣を取るがよい。(全員立つ)

ダビデ王とヨアブはこれで十分祝福されるであろう。

アヒマアズ　　ダビデ王に、いかにして神が王を敵からお救いしたかを
 伝えに行かせて下さい。

ヨアブ　　またの機会に、アヒマアズ、今はよい。—

[40]

代わりにホシャイ、お前が王のもとへ行き
 我々の勝利という幸運な知らせをお伝えしろ。

ホシャイ　　わかりました、ヨアブ様。お計らいありがとうございます。

(ホシャイ退場)

アヒマアズ　　私も行くのをお許し願えませんか？

ヨアブ　　ホシャイが行くのにお前は他に何を伝えるというのだ？

アヒマアズ　　ですがこのアヒマアズにも
 このような光栄なお役目にぜひあずかせてほしいのです。

(退場)

ヨアブ　　行きたいなら急いで行くがよい。道中の無事を祈るぞ。

さて後に続こう、そなた達は謙虚な心と和解の心で

ダビデ王に謁見するのだ。

[50]

アマサ　　恵み深き王のもとへと付いていきます、ヨアブ殿。

そして我々の剣は終生ダビデ王に栄誉を与えるでしょう。

(全員退場)

[第14場]

(ダビデ、バテシバ、ソロモン、ナタン、アドニヤ、キレアブ、および従者たち登場)

バテシバ　　我が王、イスラエルの燈火である方よ、すべての者たちの眼が、

あなたの輝く眼から、それぞれ光を受けておりますのに、

どういうわけでその美しいお顔の輝きを曇らせ、

また、お心の悩みを、その表情に表しておられるのでしょうか。

王のお心は、なぜ悲しい思いを持ち続けておられるのでしょうか、

あらゆる喜びが、王の玉座の前にひざまずき、

お慈悲をもって受け入れていただくことを懇願しておりますのに。

リュートをお取りください。そうすれば山々を踊らせ、

太陽の軌道を取り戻し、雲を抑制し、

樹木の声に耳を貸し、暴れる獅子たちを手なづけ、

[10]

唸り叫ぶ風に静寂を命じ、

また最高に晴れた日を、この上なく荒々しい嵐で満たすことができるでしょう。

それなのになぜ、はるかに力の劣った情念が

イスラエルの心に抗って、頭をもたげなければならないのでしょうか？

ダビデ　　美しいバテシバよ、お前はその美しい姿で

私の頭をいっぱいにすることによって、私を理性から引き離し

そのお前の議論の力を増そうというのか。

お前の美しさの力はいつも、この世のあらゆる喜びを超えて、
私の嘆く心を元気づける、聖なる香油としての役割を果たしてくれた。

しかし、いと高き神の娘であるバテシバ、⁽⁴⁰⁾

[20]

その美しさは、イスラエルのすべての塔を築き上げさせ、
真珠や一角獣の角の鎖で

その背後に、古い時代の黄金の世界を、すなわち

アダムが楽園で所有していた世界を、引き連れ、

その息は、すべての汚染された空気を清くし、

彼女が到着すると草原も微笑んで迎える、

その彼女、彼女、私のこの上なく美しいバテシバ、

美しい平和の女神、この世で私たちの優美さを体現する女神、

その彼女は、美しいエルサレムの通りから、

イスラエルの野から、そしてダビデの心から逃げていき、

[30]

それとともに、アブサロムの生命と魂とに結びつけられた

私の慰めを黄金の鎖につないで連れ去ったのだ。

バテシバ　それでは、私の王様のお心の喜びは

あのご息子の胸の中に深くくまれているので、

イスラエルの神が愛し、その愛ゆえに

彼にその名前をお与えになったあのソロモンも、

ダビデ王の魂を癒す慰めとはならないのですか。

ダビデ　愛する人よ、ソロモンはダビデの主君だ。

私たちの神は、彼をイスラエルの主と名づけられた。

彼のことを、(そのことゆえに、しかも彼はお前の息子であるので)

[40]

ダビデは心から喜ばなくてはならないのだ。

そして、彼は間違いなく私の王座につくであろう。

しかし私の骨肉から生まれた美の権化アブサロム、

愛の肖像ともいえる美しいアブサロム、

内なる人柄の影像であるうるわしいアブサロムも、

彼の父の心遣いの一端の分け前を受けるべき者であり、

生においても、死においても、ダビデ王の息子に他ならないのだ。

ナタン　しかし、王が言われたように、神がその子を名づけるにあたって

王として聖油を注がれた、ソロモン殿に支配させてください。

今や王子は永遠の掟を学ぶにふさわしく、

[50]

その知識は王子の若さに根を下ろして、

やがて栄光に満ちた果実をもって、その老年を美しいものにされるでしょう。

それに比してアブサロム殿は、墮落した傲慢に心を動かされ

おのれの罪をもって王国を篡奪し、汚しておられます。

ソロモン殿をこそ、王のご高齢の杖に、また

美しいイスラエルの安息、王の一族の名誉としてください。

ダビデ 我が子ソロモンよ、言ってくれ、お前はその心に刻まれた

父の教訓を大切に守ってくれるか、

そしてイスラエルの国家に重要な関わりを持つ

聖なる原則を実行することによって

私の熱望をかなえ、お前の名声としてくれるか。

ソロモン 我が父なる王よ、もし私自身の幸福のために

王の魂を糧としている、天上にふさわしい熱心さが

私自身の美德によって維持されないとすれば、

もし王の快活なお声の美しい抑揚が、

ちょうど夏の太陽に灼かれて喘いでいる

人にとって天からの息が心地よいのと同じように

私の耳を絶えず打たないとすれば、

私は赦されない罪を犯すことになり、

天の災いと地上の恥辱を恐れなければならないでしょう。

しかし、私は、その知恵が私の魂の音楽を調律してくださる

お方の、力強い御手が持っておられる技術と、

聖なる秘密とを教わろうと自分に誓っておりますので、

父上、以下のことをまず学ぶことが、私を満足させてくれるでしょう。

永遠なる神が、どのようにして蒼穹を形づくられたか、

どの天体が、火によってその影響を及ぼすのか、

そしてどの天体が白色の冬の氷に満たされているのか。

どのような徴候が雨天をもたらし、どの星が晴天をもたらすのか。

どうして、狂いのない調和の法則によって

一年は常に月に分割され、

月は日に、また日は一定の時間に分割されるのか。

いかなる多産な種族が未来の世界を満たすのか。

あるいはいつまでこの丸い世界は存続するのか。

いかなる為政者たち、いかなる王たちが、永遠の法則による

制御によって、人々の心に畏敬の念を持ち続けさせるのか、を。

[60]

[70]

[80]

ダビデ 我が子よ、あまりにも深い海の中を、あまりにも遠くまで渡ってはならぬ。

我々の高さを望む思いは、弱い眼しか持たず、

それは現在のものを見、過去のものを記録しはするが、

やがて来るべきものは、我々人間の理解を超えており、

天使たちの眼にも、まだ描かれてはいないからだ。

[90]

これらについては、お前の分別を服従させ、そして言うがよい、「力なる神よ、

今や、未来の世界を創造しておられるお方、

あなたは来るべき事全てをご存知です。しかしそれは天の運行によってではなく、

また様々な下位の徴候の、根拠に乏しい推測によってではなく、

恐ろしい大洪水や、鳥たちの飛翔や群がりによってではなく、

生贄とされた動物の内臓によってではなく、

また、何か怪しい秘術の、様々なしるしによってでもなく、

真実で、かつ自然な予徴によってであります、

それはアダムから始まって、アダムの子孫の終わりに至るまで

今やあなたの目の前にある、我々の全ての行為の

[100]

基礎と完全な建造物を据えられてのことなのです。

おお、天なる神、あなたのお力をもって私の弱さを守ってください。

私がおあなたのお顔を眺めて、あなたの額に書いてある

それらの秘密を見ることができるよう、私にお顔を向けてください。

おお、太陽よ、お前の光線を私の月の上に投げかけてくれ。

そうすれば、地球に対して覆い隠されている私の両の眼は

明るく洗練されて、天に向かって輝くであろう。

私を、この肉体から変質されてくれ、そうすれば私は

私の死の前に、生き、お前とともによみがえるであろう。

おお、あなた、偉大なる神よ、私の地上の靈魂を連れ去ってください。

[110]

その間、人間わざを超えた御手のわざが

私の全ての感覚の器官を養ってくださるように、

また私が物を思うとき、あなたのご思考が私の導き手となり、

私が語るとき、私が特に選ばれて

あなたの天上の御声の完全なこだまとされますように」と。

そのように言うがよい、我が子よ、そうすればお前はそれら全てを学ぶであろう。

ソロモン 神秘なる熱情がわが魂をとらえ、

人智の限界も超えて上昇させます。

まるでひどい空腹に耐えかねて立木から飛び立った鷲が

羽ばたいて空高く舞い上がり、 [120]

羽毛のある餌食を捕まえて、いざ食らおうと思ったその矢先に、
足の遥か下に雲を見て、

その鳥を落とし、大胆な勇気に奮い立ち、

太陽の輝きをものともせず直視して、

堂々たる太陽の天球近くまで上昇するかのごとく、

ソロモンも、神に捧げる熱情に

燃え立つ翼にのり、この世の糧を捨て、

感覚を天上の旋律で喜ばせ、

金色に輝く星の迷宮に歩み入り、

この目をエホバの額にじっと見据えて離しません。 [130]

どうか父上、何をなすべきか、もっと私にお教えてください。

ナタン　ダビデ様、ソロモン殿の高貴な精神の飛翔をご覧ください。

いまや王権を振るえるほどの気高さです。

いまこそソロモン殿を跡継ぎとするとお約束なさいませ。

イスラエルのご老体を戦乱のご苦勞からご解放なさる時が来たのです。

ダビデ　預言者ナタンよ、エッサイの根から出た者として、⁽⁴¹⁾

そなたと美しいバテシバに約束しよう。

わが子ソロモンを後継者として統治させよう、と。

バテシバ　その正当な考えをあなたに抱かせてくださったお方が、

その考えの住処であるあなたを平和に保ってくれますよう。 [140]

(使者が登場)

使者　王様、あなたの従者が見張りをしておりましたところ、
戦地からこちらに向かって走ってくるものを見た、とのこと。

ダビデ　一人で参ったなら、知らせを持ってきたのだ。

使者　あなたの従者はもう一人見たと申しております、王様。

その走ってくる様子はザドクの息子によく似ているとのこと。

ダビデ　その者はよい男だ、よい知らせをもたらしてくれる。

(アヒマアズが登場)

アヒマアズ　わが主君たる王に安らぎとご満足がありますよう。

イスラエルの神が王に勝利を下さいました。

ダビデ アヒマアズよ、教えてくれ、わが息子アブサロムは生きておるか？

アヒマアズ 兵士たちが大勢群がっているのを目にしましたが、 [150]

それが何の騒ぎなのかはわかりません。

ダビデ そこで待つがよい、いずれだれか他の者がダビデの心に

嬉しい真実をもたらしてくれるはずだ。

(ホシャイが登場)

ホシャイ ダビデ王の心に幸福と栄誉がございますよう、

神は王に敵を征服させていただきました。

ダビデ それでだ、ホシャイ、あの若きアブサロムは生きておるのだな？

ホシャイ ダビデ王の平安に頑迷にも敵対する者ども、

並びにダビデの王冠に対して矢を投げる者どもはすべて

必ずやあの若きアブサロムのようになりますよう！

アブサロムがエフライムの森を驟馬で通る際、 [160]

森はあなたの臣下すべてと同じく、あなたの味方となって戦ったのです。

アブサロムの髪が葉陰を作る檜の枝に絡まり、

そこにおら下がっていると、ヨアブとその部下たちの手により、

死の一撃を当然の報いとして受けました。

ダビデ アブサロムが死の一撃を受けたというのか？

死ぬのだ、ダビデよ、アブサロムの死の償いとして。

このように呪わしい知らせがむごたらしい投げ矢となって

アブサロムの腹を突き通し、お前のあさましい胸を引き裂かせるのだ。

ここから去るのだ、ダビデ。人里はなれた寂しい森を歩き、

どこかのシーダーの木陰、雷が落ちて [170]

天からの火が枝を黒く焦がしたシーダーの木陰に、

アブサロムの死を悼んで腰を下ろそう。

その雷に打たれた木の幹にぶつけて、

お前の象牙色のリュートを粉々に壊してしまおう。

弦のないお前の豎琴を枝にぶらさげて。

空洞で、干からびた、音の反響する幹のうろに怒鳴って

お前の魂を悩ませる苦しみを吐き出せばいい。

そこで風に溜息をつかせ、やがてそれが突風となって吹き荒れ、

黒い雲に包まれた嵐に

その凶暴な顔で森を脅かさせるがよい。

[180]

荒々しく鉄の翼に乗り、

私のかわいいアブサロムを捕らえて死に至らしめた

そのひどいわなを根こそぎ引きちぎらせるのだ。

私の壊れたリュートを風で天まで吹き飛ばし、

私を弦で打ちのめすお方の手に放り上げるがよい。

かの方の哀れな羊飼いが悲しく歌うさまをお見せするのだ。

(天幕の方へ行き、しばらくその中に閉じこもる)

バテシバ 死ぬがいい、バテシバ。お前のダビデ王が嘆いているのを目にして。

その苦悶と苦痛の声を耳にして。

ああ、お救いください、私のダビデ、あなたのバテシバをお救いください。

(バテシバはひざまずく)

私の心臓はあなたの息という剣で刺し貫かれ、

[190]

1万もの苦しみがのしかかってはちきれてしまいます。

今のあなたの悲しみが私の血を吸っているのです。

ああ、その悲しみにとってわが血が毒となり、

悲しみの唇がわが胸を空っぽになるまですすってくればいいのに！

そうすればダビデへの愛が彼を癒してくれるかもしれない、たとえバテシバが死んでも！

ナタン このように激しい感情は天上から生まれ出たものではありません。

ダビデ王もバテシバもいと高きお方へ罪を働いております。

このように計り知れない悲しみようをなさるとは。

ダビデ ああ、アブサロム、アブサロム！ああ、私の息子、私の息子！

アブサロムの代わりに私が死んだらよかったのに！

[200]

それなのにアブサロムが死んだのだ。ああ、死んでしまった、アブサロムが死んでしまった、

だからダビデが生きているのはアブサロムの代わりに死ぬためだ。

(ダビデは外の様子を窺い、その後再び閉じこもる)

(ヨアブ、アビシャイ、イットアイ、供を連れて登場)

ヨアブ　なにゆえお妃様はこのように地面に伏しておいでなのか？
 ここにおいでの方々はどのように悲しいお顔をしているのか？
 王が家臣から離れて今はここにおいでにならず、
 凱旋して門を通り行進なさらないのはなぜなのか？

(天幕を開ける)

ダビデ王、目をお覚ましなさい。もしも眠りがあなたの目を閉じさせたのだとしたら。
 それは息子への愛という眠りです。勝者の頭に捧げられた栄誉が
 あなたには見えないのですから。

ヨアブは槍につきさして勝利をもたらしたのです。 [210]

イスラエルの全部族から喜びをもたらしたのです。

ダビデ　お前は残酷な男だ、死を飲み込む墓だ。
 その大理石のように冷ややかな胸は私の情けなど生きてまま葬り去ってしまう。
 私はお前に命じなかったか、否、その手をとって懇願しなかったか？
 私を思うなら、わが子アブサロムの命を助けるようにと。
 それなのにあなたは、ダビデの健康もないがしろにし、
 わが心を幸福にすることも拒み、

アブサロムに剣を振るい、彼の高貴なる魂を引き裂いてしまったというのか？

ヨアブ　なにゆえダビデ様はいらだっておられるのか？ 勝者が生きており、
 ユダの民とイスラエルの野がその表から子らの血を洗い清めるべき時なのに。 [220]
 あなたは王の統治に飽きてしまわれたのか？

あなたの目にイスラエル王の玉座は毒蛇と映っているのか？
 あなたを玉座につけてくださった主は感謝もされないというのですか、
 主のなさったことのゆえにあなたがその下僕を呪わねばならぬほどに？
 汝の家は、朝の光、雲のない朝で

あるべきであって、
 この上なく輝く雨により、
 急速に育ち、急速にしおれる
 植物であってはならないとあなたはおっしゃいませでしたか？

邪悪な者たちは棘（とげ）のようなもので、 [230]

素手では持ち堪（こた）えられぬ。
 棘を触ろうとする者は、鉄の鎧に
 鋼鉄でできた長上着を着用したり、

あるいは、防御用の投げ槍という飛び道具を使って、武装しなければならぬと
あなたはおっしゃいませでしたか？

罪なき者たちを群れなして死に導いた者、
それゆえ、部下たちの群れより邪悪だといえる者が、その命を、
絶たれたことに腹を立てていると？

憂鬱の洞穴から出て来られよ。

そして、至福のローブをまとして着飾られるがよい。

さもなければ、天を支配する主にかけて、私は誓いますぞ。

[240]

あなたの軍を彼らの気高い騎士道精神を賞讃する

他の王のもとに連れて行くと。

怖（お）じ気づいたように座り込み、暗がりでもつつりするのをお止めください。

本来であれば聖油と葡萄酒で気を回復した国王の晴れやかな表情が

彼らの胸に喜びの光を素早く投げかけ、

その胃袋を勝利のご馳走で満たすべき時に。

どこか他で厳しい戦がその喇叭の音を響かせ、

その戦場にまた別の戦を呼び戻す時、

常に名声こそが、汝の勇敢な兵士たちを故国に取戻すことができるように。

名声が彼らの奉仕に対して、彼らの武勇を価値ある喇叭で響かせることを

[250]

欲していたのだ、と幸せな気分で告白できるように。

どうかこの道を探って、生きて下さいませ。それを拒まれれば、死ぬしかありません。

アビシャイ さあ、兄弟よ、彼をそこにゆったりと座らせてあげましょう。

ヨアブの名は誰か他の者に高めさせればいいのです。

(アビシャイは、ここを出ようとする。ダビデは立ち上がる)

バテシバ ああ、どうか、皆様、そのままでいらして下さい！ダビデ王が立ち上がって、
皆さんの行動に名誉を与えようとしておられます。ダビデ王はもはや悲しんではおられません。

ダビデ それでは、ダビデの最も美しい息子よ、お前は幸せ者だ。

この世の煩わしさというわなから解放され、

人間的な罪の感覚から引き離され、

お前の魂は、その神聖な小部屋を楽しんでいる。

[260]

お前の変容した魂に天上の至福を与える、

あの神々しい観念に満ちた小部屋を。

それでは、お前は逝ってしまったのだな。ああ、逝ってしまった、我が息子よ！

きつと天国へと、我がアブサロムは召されたのだ。

お前の魂は、そこで、聖人たち、

あるいは、不滅の衣を着た天使たちの名誉の中に置かれ、

お前の悲嘆を悉く癒すため七重もの恩寵を刈り取るだろう。

お前の目は——今となってはもはや目とは言えず、輝く星々としか言えぬが—

輝く天を、それらの新しく造られた灯火（ランプ）で飾るだろう。

そこでお前は天上の飲み物を味わい、

[270]

大天使たちの食事を食べて、感覚を慰めるだろう。

お前の休みの日、お前の神聖な安息日は、

永遠のものとなるのだ。カーテンが開けられ、

お前は、お前の主君たる神を、驚きをもって

じかに拝見するのだ。

無限の、また、無数の一致として結合された三位一体の至高なるお方のお顔を—

勇気を出せ、勇敢な隊長たちよ！ ヨアブの話が王の心を動かし、

イスラエルの懇願を優先させてくれた。

ヨアブ 立派にお心を決められ、国王に相応しいお話をされた。

さあ、古より続くイスラエルとその娘たちに歌を歌わせるとしよう。

[280]

(全員退場)

訳 注

- (1)ここに訳出したジョージ・ピールの『ダビデとバテシバ』は、旧約聖書サムエル記下で叙述されるダビデ、および彼を取り巻く人物の物語に基づいている。訳出に際しては、Norman Rubkin の解説 (Russell A. Fraser and Norman Rubkin ed., *Drama of the English Renaissance: I. The Tudor Period*, Upper Saddle River, NJ: Prentice Hall, 1976, p.145) を参考にした。人名、地名等、固有名詞の日本語表記は、『口語訳聖書』(日本聖書協会 1955年) に拠った。
- (2)古典叙事詩の形式に則った詩神 (ここではユダヤ・キリスト教の神) に靈感を求める祈願 (インヴォケーション)。この劇では、「～について私は歌う、されば詩神よ、助けたまえ」という、ヴェルギリウスの『アエネーイス』の冒頭の祈願と同じ形を取る。これは、「～について歌い給え」と祈願するホメロスの『イーリアス』、『オデュッセイア』、また後のミルトン『楽園喪失』に見られる形とは異なる。
- (3)「歌びと」は、この劇の主人公ダビデのこと。ダビデは詩人で、堅琴に合わせて歌い、旧約聖書の詩篇は彼の作であると信じられた。
- (4)原文は Jove となっている。ここでは、ヤハウエ (エホバ) のこと。
- (5)「シオン」は、エルサレムにある丘。ここをダビデが占領し、その後ソロモンが神殿を建てた。「シナイ山」は、モーセが神から十戒を授かったと信じられているシナイ半島南部の山。
- (6)「リュート」は聖書には出ていないが、ピールは、エリザベス 1 世の時代にポピュラーであったこの楽器を、

ダビデに弾かせている。

- (7) 天使の9つの位階の第2位。単数形は「ケルブ」。「大天使」(Archangels)は、同じく天使の9つの位階の第9位。
- (8) この劇のもう1人の主人公であるアブサロム。
- (9) ユダヤ・キリスト教の神ヤハウェのこと。神聖4文字 YHWH は、アドナイ、エホバなどと発音された。
- (10) 詩篇第133篇に、兄弟が愛し合うことを「ヘルモンの露がシオンの山に下るようだ」(3節)と歌っている。ヘルモン山は、ヨルダン川東部でイスラエルの勢力が及んだ領域の北限をなす。現在のレバノンとシリアの境界に連なるアンティ・レバノン山脈の最高峰(2800メートル)。
- (11) 「老アロンの鬚から滴る香油」は、同じく詩篇第133篇にある表現。「それ(兄弟が愛し合うこと)はこうべに注がれた尊い油がひげに流れ、/アロンのひげに流れ、/その衣のえりにまで流れくだるようだ」(2節)。アロンは「あなた(モーセ)の兄弟レビびとアロン」(出エジプト記4:14)とある人物で、モーセの同伴者。アロンの子孫は代々祭司の役を務めた。
- (12) サムエル記下に記される彼の行動は、この劇では、第8場112行以下で展開される。
- (13) 「ヘテ人」ヒッタイト人。ダビデの時代には、ヒッタイト人は、ユダヤ人と混住し、ウリヤに見られるように、ダビデの軍隊で重要な地位につく者もあった。
- (14) Almond は、春に先がけて淡紅色の花を咲かせる。アロンの杖は、アーモンドの木でできていた。「・・・アロンのつえは芽をふき、つぼみを出し、花が咲いて、あめんどうの実を結んでいた。」(民数記17:8)
- (15) アンモンの子孫すなわちアンモン人。創世記19:38では、ロトが彼の妹に生ませたベニアンミが、アンモン人の先祖であるという。彼らはイスラエルの民がカナンに入ったとき、既にヨルダン川東部に住んでいた(申命記2:17-21, 23:3-4)。その後、同じく死海の東部に住んでいたモアブ人と共に、彼らはイスラエル、ユダの地にたびたび侵入した。
- (16) イスラエル人とアンモン人は、ヨルダン川をはさんで争いを続けていたが、王サウルは、アンモン人の王ナハシを打ち負かした。ナハシはサウルから追われていたダビデに対して友好的であった。しかし、その子ハヌンは、ダビデの力を軽視し、ダビデが友好の意図をもって送った使者に侮辱を加えた(サムエル記下10:1-5)。ダビデはそれに対して反撃を加え、ラバの町を占拠したわけである。
- (17) モーセがエジプトに雹を降らせた記事は、出エジプト記9:18-34にある。
- (18) ラバの町は、南の低い部分に泉が湧き、川が流れており、北側の高い部分に守備塔があった。
- (19) ダビデがサウル王から逃れた時、アンモン人の王ナハシが、反サウルの立場からダビデを助けてくれたこと(サムエル記下10:2)。
- (20) ダビデ王は、若い時、羊飼いであった。
- (21) ヨアブを指揮官とするラバの攻囲は1年以上にも及び、その間ダビデ王はエルサレムにあって後宮で過ごし、バテシバとの関わりもこの時の出来事であった。ヨアブのダビデ出陣要請は、第3場192-96行でも、ウリヤを通じてなされる。ダビデが自ら出陣してラバを占拠、陥落させる場面は、第7場で展開される。
- (22) ヨエル書3:2および3:12に「ヨシャパテ(Je-hosha-phet)の谷」とある。ヨシャパテはソロモンから4代目のユダ王国のすぐれた王。
- (23) レバノン杉については、高さ30メートルを越す堂々たる樹形と、芳香、硬質の材で知られ、神殿や王宮の建築などに用いられた。ロンドンのキュー・ガーデン(Kew Gardens)で見ることができる。
- (24) エトレイという名は、聖書には出てこない。アムノンのタマル陵辱の場面では、「アムノンのしもべ」と書かれているだけである(サムエル記下13:17-8)。
- (25) 当時のヒッタイト人、あるいはウリヤ自身がどのような宗教、また偶像を信じていたか明らかでない。いずれにしても、ウリヤがイスラエルの神を信じるようになったこと。
- (26) この箇所は、聖書の記事と一致していない。聖書では、一方で契約の箱、イスラエル、ユダの人々、及び今戦場にあるヨアブやその他の兵士たち、他方で自分が避けようとしている安楽とが対比されている。
- (27) ナタンのエピソードは、サムエル記下12:1-15に出ている。彼はこの少し前、神殿造営のことでダビデから相談を受けている。ソロモン出生のときは、神から命じられてその子をエデデアと名づけた(サムエル記下12:24-5)。またダビデの後継者を決定する時は、兄アドニヤを退け、ソロモンを推した(列王記上1, 1-2章)。
- (28) この箇所は、聖書の記述と異なっている。聖書では、アブサロムの方が皆を羊の毛刈り祭に招いたことになっている(サムエル記下13:23-9)。また聖書では、アブサロムがアムノンに復讐を果たすまでに、満2年が経過したことになる。

- (29)シェイクスピアの『冬物語』に見られる毛刈り祭の祝い（第4幕第4場）を思わせる場面。
- (30)ギベオンは、エルサレムの北東にある町。イシボセテはサウル王の子。アブネル率いるサウルの軍と、ヨアブ率いるダビデの軍が戦った時、両軍はそれぞれ12人の兵士を出して戦わせた。彼らはみな共に倒れて死んだ（サムエル記下2：12-17）。
- (31)アンモン人は、ペリシテ人と連合してイスラエルに敵対していた。ペリシテ人は、パレスチナの海岸地方に勢力を持っていたが、しばしば内陸部を侵し、ユダやイスラエルと戦った。サムエル記上4章から6章にかけては、神の箱が一時ペリシテ人に奪われたことが記されている。ベニヤミン族は、ヤコブの末子ベニヤミンを先祖とするイスラエル12部族のひとつ。彼らは主として、ユダとエフライムの中間の狭い地域（ベニヤミン）に住んだ。
- (32)この箇所は、サムエル記下14：1-20に出てくる。テコアは、エルサレムの南方、ヘブロンの中から死海に向けて広がる山地にあったユダ族の町。
- (33)ガテはペリシテ人の5都市のひとつ。すなわち、イツタイは、ペリシテ人であるが、何らかの理由で追放され、家族や部下とともにイスラエル側に移っている。そして、今ダビデの傭兵隊長として部下を率いてダビデに従っている（サムエル記下15：18, 19-23）。ダビデは、サウルから追われていた頃、ガテの王アキシの所に一時逃れて、彼の庇護を受けていた（サムエル記上21：10, 27:2-4）。
- (34)ヨアブ、アビシャイ、アサヘルは、ヘブロンを治めていたダビデの部下。彼らはサウル軍の隊長アブネルと戦っていたが、アサヘルは、アブネルを追っていた時、後ろを振り向いたアブネルの槍の石突きに突かれて死んだ（サムエル記下2：23）。後に、兄ヨアブはアブネルを殺し、アサヘルはアブネルの仇を討った（サムエル記下3：27）。
- (35)ヘブロンは、エルサレム南方にあるユダの町。かつてダビデが油を注がれてユダの家の王となり（サムエル記下2：4）、さらに後にイスラエルの王になったところ。サウルの死後、ダビデはヘブロンを首都と定め、ここで7年半の間支配していた。ヘブロンはユダ族の中心地で、ヘブロンの人々は、その後ダビデがエルサレムを首都としたことに反感を持っており、今、アブサロムはそれに便乗したのである。
- (36)この行為は、王位篡奪の象徴である。列王記上1：5参照。
- (37)イスラエルの全領土を表す慣用句。ダンはイスラエル最北端、ベールシェバは最南端の町。
- (38)シメイがダビデを呪う記事は、サムエル記下16：5-14にある。彼はサウルの家にも属する者で、ダビデがサウルの王位を奪ったことを非難する。ダビデは、エルサレムに入ったアブサロムの反乱軍から逃れる途中、バホリムの近くを通過しなければならなかった。これはその時の出来事である。この劇の中には出てこないが、シメイは、後にダビデに帰順する。
- (39)かつてダビデがペリシテ人と戦った時、神は「バルサムの木（mulberry trees）の上に行進の音が聞こえたならば彼らを襲いなさい」とダビデに告げ、ダビデは命じられたとおりにして、ペリシテ人を撃ち破ったことがあった（サムエル記下5：22-25）。アブサロムは、今、そのことを自分に当てはめて言っているのである。
- (40)ここに神の娘とあるのは、バテシバはダビデとの間に、後のイスラエルの王となるソロモンを生んでおり、そのソロモンの母であるということからきている。バテシバは、しばしばキリストを生んだ聖母マリアと重ねて解釈されることがある。
- (41)ここは、意味上「エッサイの根から出た」者はダビデと解釈するのが適当である。